第 15 回　中野区ゆかりの著作者紹介展示

中也と中野と中央線

展示期間：平成３０年１２月１日(土)～平成３１年１月２４日(木)

中野区立中央図書館

もくじ

はじめに 1
中原中也プロフィール 2
中也の人間関係 3
中也と家族 4
三角関係 6
○小林秀雄　○長谷川泰子
影響を受けた人物 8
○高橋新吉　○アルチュール・ランボー　○宮沢賢治
中也の友人関係 10
○富永太郎　○青山二郎　○安原喜弘　○諸井三郎
○草野心平　○大岡昇平　○河上徹太郎
○関口隆克　○高森文夫
中也という人間 16
中也が関わった同人雑誌 17
中也の外見 18
文房堂～中也の使った原稿用紙～ 20
中也の引越し先一覧 23
中也の中野暮らし地図 24
中也と鉄道 28
中央線と中野駅 30
中央線年表 36
中央線沿線に住んだ文士たち 40
○高村光太郎　○太宰治　○坂口安吾
中原中也年表 42
展示風景・展示物 45
ブックリスト 49

表紙写真：展示全景（職員撮影）

はじめに

中央図書館では、毎年、中野区ゆかりの人物を特集する展示を行っています。今年度の特集は詩人・中原中也です。

山口県出身の中原中也は大正 14 年 18 歳で上京後、数年間中野に住んでいました。初期の代表作「朝の歌」は桃園（現・中野 3 丁目）の下宿で作成されたものです。

また、同時代は鉄道の発達により中野の町も急速に変化していた時期でした。*「新しく出来た六間道路とその周辺の者が呼んでいる通りには…」*と中也の作品の中にも、当時、つくられたばかりの中野通りが登場します。

独特のリズムと世界観を持つ中也の詩は、今でも多くの人々に愛されています。本展では中也の中野での生活を中心に、中央線の歴史を併せて紹介します。

中原（なかはら） 中也（ちゅうや）

明治 40(1907)年 4 月 29 日～昭和 12(1937)年 10 月 22 日

詩人・翻訳家。山口県吉敷郡山口町大字下宇野令村（現・山口市湯田温泉）出身。昭和 8 年東京外国語学校専修科仏語修了。13 歳の時に地元の新聞『防長新聞』に短歌を投稿し入選。大正 11 年、友人たちと共著で歌集『末黒野（すぐろの）』を刊行するなど、学生時代から文学活動を積極的に行った。

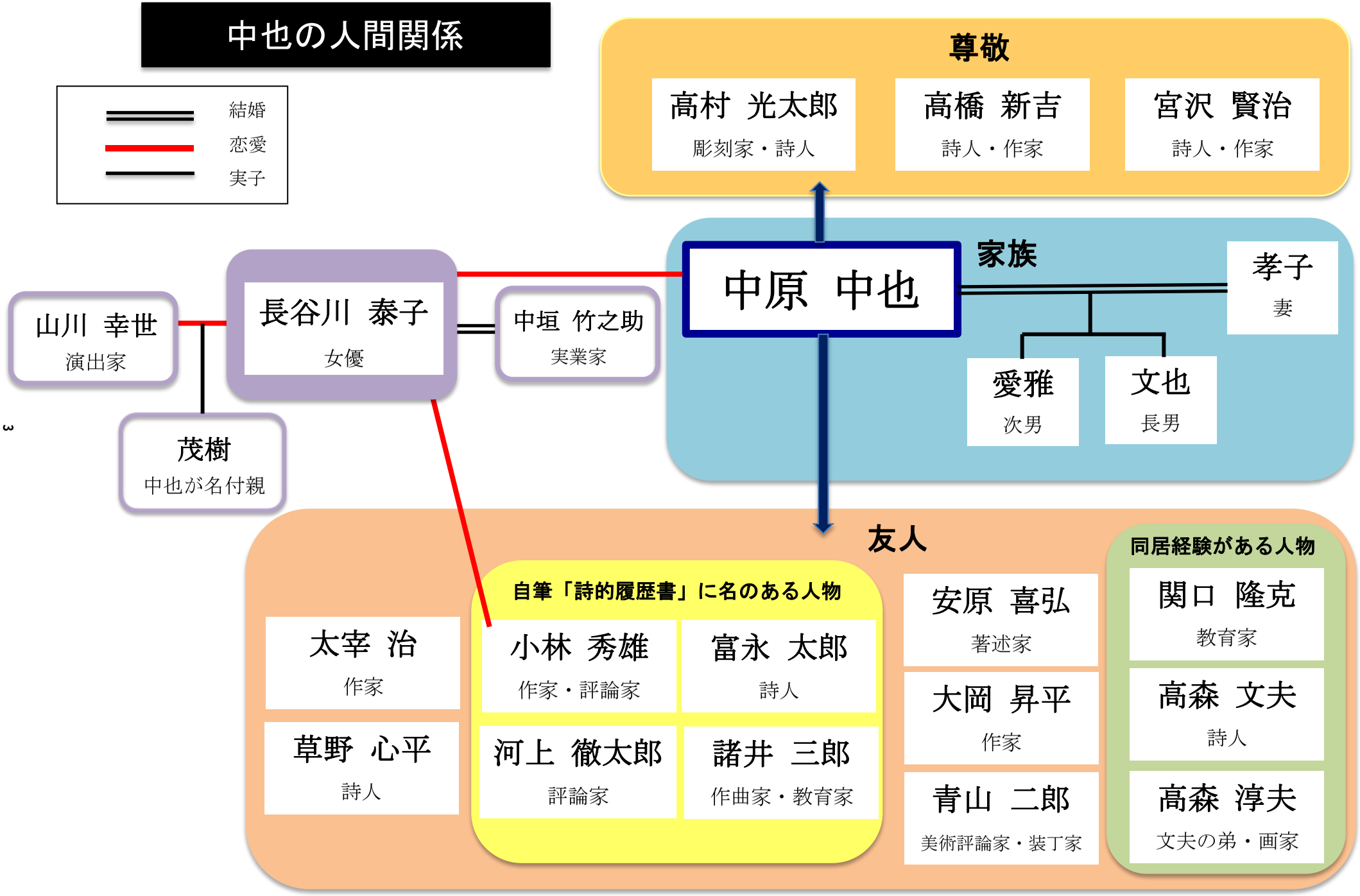
▲ 大正 14 年 中也肖像
［提供：中原中也記念館］

次第に勉学よりも文学に傾倒。12 年県立山口中学校を落第し、家を出て京都の立命館中学に転入。京都の古本屋で高橋新吉著『ダダイスト新吉の詩』に出会い、ダダの詩を書き始める。また、当時京都に来ていた富永太郎と親交を結び、フランス象徴派の詩人ボードレールやランボーを学ぶ。14 年大学受験のために上京。以降詩作にはげみ、大正 15 年に中野町桃園の下宿で作られた代表作、「朝の歌」を昭和 3 年『スルヤ』第 2 輯に発表。同 4 年河上徹太郎、大岡昇平らと同人誌『白痴群』を創刊した。

昭和 8 年遠戚に当る上野孝子と見合い結婚。9 年には長男文也が誕生。同年に第一詩集『山羊の歌』も刊行し、順風満帆であったが、2 年後の 11 年 11 月、小児結核により文也が早世してしまう。次男愛雅が誕生するも、文也を失ったことで神経衰弱が高じ、母フクの判断で翌 12 年 1 月中村古峡療養所へ入院。退院後、文也の思い出のつまる東京で暮らす事が辛くなり、友人たちの住む鎌倉へ転居。詩作に励んでいたが、その年の 10 月結核性脳膜炎を発病し、30 歳の若さでこの世を去る。

没後昭和 13 年、第二詩集『在りし日の歌』が青山二郎、河上徹太郎、小林秀雄など友人たちの手で刊行された。平成 6 年生家跡地に中原中也記念館が開館。詩集はわずか 2 冊にも拘らず、今でも多くの人を魅了している。

中也の人間関係


結婚
恋愛
実子
尊敬
高村 光太郎
彫刻家・詩人
高橋 新吉
詩人・作家
宮沢 賢治
詩人・作家
家族
中原 中也
孝子
妻
愛雅
次男
文也
長男
長谷川 泰子
女優
中垣 竹之助
実業家
山川 幸世
演出家
茂樹
中也が名付親
友人
自筆「詩的履歴書」に名のある人物
太宰 治
作家
草野 心平
詩人
小林 秀雄
作家・評論家
富永 太郎
詩人
河上 徹太郎
評論家
諸井 三郎
作曲家・教育家
安原 喜弘
著述家
大岡 昇平
作家
青山 二郎
美術評論家・装丁家
同居経験がある人物
関口 隆克
教育家
高森 文夫
詩人
高森 淳夫
文夫の弟・画家

中也と家族

中也は医師である父謙助と、母フクのもとに誕生。弟に次男亜郎（つぐろう）、三男恰三（こうぞう）、四男思郎（しろう）、五男呉郎（ごろう）、六男拾郎（じゅうろう）、と 6 人兄弟の長男であった。そのうち亜郎と恰三は、中也よりも先に亡くなっている。

▲ 大正 7 年頃 中原家の家族写真
［提供：中原中也記念館］

医師資格試験に 20 歳の若さで合格した父謙助が軍医を退き、中也の祖父政熊が開業した医院を継いだのは、中也が 10 歳のとき。両親のしつけは厳格で、兄弟で一番厳しくしつけられたのは中也であった。中也は小説を書いたり短歌を詠んだりと、次第に文学に傾倒していくようになるが、両親には理解されず、中也が文学をやろうとすると邪魔ばかりしていたという。

山口県の中学を落第し京都の中学に通うようになって以降、死ぬまで中也は再び故郷で暮らすことはなかった。家族旅行も長髪を理由に父に止められ不参加、その父親の葬式へも、長髪を嫌がる母と祖母の意見を聞き、病気のために参加できないという嘘の電報を打つことになった。大人になっても中也の詩や外見、表現に対する家族の理解はなく、「今でこそ何と思っているか知らないが、長男が詩人に成ったりして、當時は――葬式まで友達なんぞと謂う碌でもない人間共に、委ね兼ねたのだった」と青山二郎が言うように、中也の葬式さえも家族ではなく友人たちが行った。フクは後年「私はあの子のことを、よくわかってやろうとしませんでした」と振り返り、弟の思郎は「中也は母を困らせ悲しませるためにだけ存在した」と語る。

しかし、中也は生涯、湯田の実家からの仕送りで暮らした。それは結婚してからも変わらず、文也誕生の後は一時岐阜出身の女中すら雇っていた。さらに、『山羊の歌』の出版費用や、最後の転居となった鎌倉寿福寺の家の経費なども中也の要請に応じて母が工面している。中也が生涯一度も働かず、詩を作り続けることができたのは、実家の協力なしには考えられ

なかった。昭和 40 年 6 月 4 日、井上公園に中也の詩碑が建立されたとき、フクは「チュウちゃんが、中原家四百年の歴史の中で一番偉かったのじゃろうか」といい、中也の写真の前に打伏して動かなかったという。

中也と孝子

中也は昭和 8 年 12 月、中原家の遠い親類であった上野孝子と結婚。結婚式は湯田の西村屋という温泉旅館を借りて、盛大に行った。中也 26 歳、孝子 20 歳の見合い結婚であった。二人の見合いは順調で、その日のうちに結婚することが決まった。孝子は後に、中也が座っていたので、身長が低いことが分からなかった、あの時立ち上がらせてみれば良かったと、冗談交じりに話していたという。さっぱりしていて頭が良く、美人であった孝子が嫁にきてくれたらと母フクも歓迎した。

▲ 結婚写真

［提供：中原中也記念館］

青山二郎は孝子を「極めて素朴な石頭の、家ねずみのような若い女性。下駄屋も詩人も区別すること無く、亭主だから亭主にして、女房だから女房になつた」と表現。しかし孝子は方々からくる結婚話を、商売人には嫁ぎたくないと言って断る面をもっていた。

孝子は長男文也を妊娠中、盲目になる可能性のある眼病にかかった。その間の 3・4 ヶ月、中也は毎日手を引いて孝子を病院に連れていった。青山はまた孝子と中也の関係について「中原の女性に対する愛情が彼を更生させてゐた」と振り返っている。

中也が没したあと、孝子は詩を作ったり、小説を書いたりする人間が大嫌いになったとフクに語った。「私はああゆう連中には、もう寄りつかん」といい、中也やその周囲の人間をどう思っていたかを推し量ることができる。しかし、「孝ちゃんはほうっておくと、中也のことや、子どものことを思い出しては泣き、思い出しては泣きました」とフクが言うように、中也や子どもを失った悲しみは深かった。フクはそんな孝子の気を紛らわすために、様々な習い事をさせた。その後もフクと孝子は実の母子のようで、再婚もフクが世話をした。

三角関係

中也と友人小林秀雄と、恋人の長谷川泰子。小林が後に「奇怪な三角関係」と記した3人の関係は、親しい文学仲間たちは皆知るところであった。泰子が小林の元へ去った後、中也は「私はただ口惜しい人になった」と書き綴った。それでも中也と小林の友情は、中也が死ぬまで続いていった。中也没後の追悼文に、「あゝ、死んだ中原　僕にどんなお別れの言葉が言へようか　君に取返しのつかぬ事をして了つたあの日から　僕は君を慰める一切の言葉をうつちゃつた」と記した小林の気持ちを、中也が知ることはなかった。

小林（こばやし） 秀雄（ひでお）

明治35(1902)年4月11日～昭和58(1983)年3月1日

作家・評論家。東京市神田区（現・千代田区）出身。東京帝国大学文学部仏文科卒業。『山繭』『文学界』の創刊に参加。近代批評の立役者、文壇の大御所といわれ“批評の神様”“言葉の魔術師”とも評された。80歳で死去。著書に『本居宣長』『無常といふ事』など。

大正14年4月、小林と中也は富永太郎の紹介で知り合い、意気投合。出会って一週間もたたないうちに、東京での下宿料一ヶ月分もの大金を中也に渡すなど、急速に仲を深めた。

その半年後には、泰子と二人の「奇怪な三角関係」がはじまるが、二人は文学を通じて交際を続けた。小林は中也の最初の詩集である『山羊の歌』出版時には関係者へ中也を紹介し、書評で「誰の真似もしないいい詩」「当代稀有の詩人」と絶賛。自身が編集に携わっていた雑誌『文学界』に毎月のように中也の詩を掲載するなど、中也の作品を世間に広めた。

二人が鎌倉に移った中也の晩年は、家族ぐるみで交流を重ね、親交を深めた。ある夜東京の会合で、中也の詩集出版の話がもちあがったとき、「今夜はこれから帰って一つ中原を喜ばしてやろう」と鎌倉に帰って行った小林の顔を、『歴程』同人の菊岡久利は「嬉しかっただけにありありと覚えている」と語っている。「一種の悪縁」と小林が呼んだ中也との関係だったが、中也が死去する約1ヶ月前に、二冊目の詩集『在りし日の歌』の清書原稿を小林に託したことからも、二人の強い信頼関係をうかがうことができる。

長谷川（はせがわ） 泰子（やすこ）

明治 37(1904)年 5 月 13 日～平成 5(1993)年 4 月 11 日

女優。広島県出身。広島女学校卒業。女優を志し、マキノ映画製作所、松竹キネマ蒲田撮影所に入社。昭和 6 年、“グレタ・ガルボに似た女”に当選。著書に中也との関係を口述した『ゆきてかへらぬ』がある。89 歳で死去。

広島から 19 歳で上京、関東大震災後に京都へ移り住んだ泰子は、所属していた劇団の稽古場で中也と出合う。中也が見せた自作の詩に「おもしろいじゃないの」と感想を述べたことをきっかけに、交流が始まった。二人はその後一緒に暮らしはじめる。

大正 14 年、中也と共に京都を離れ東京に移ると、泰子は中野の下宿先に訪ねてきた小林秀雄と出会う。互いに惹かれ、「一緒に住もう」という小林の一言をきっかけに、小林との同棲生活をはじめる。泰子は約 2 年半後に小林と別れ、演出家・山川幸世との間に子どもを授かる。中也はその子(茂樹)の名付け親となり、おもちゃを買い与えたり、病気の心配をしたりと、愛情をもって接した。

昭和 12 年に行われた中也の告別式には、前年に結婚した夫・中垣竹之助と、茂樹と共に出席している。その際、人々から離れて中也の死に涙していた。後年、中也が生きていた頃親切にしてくれたことをうるさく思ったり、わずらわしく思ったりしたことも多くあったが、先立たれてしまえばやはり悲しく思ったのだと振り返り、「喧嘩しながらも決して中原から離れて行こうなどと考えたことありません。中原の文学は私の思想の郷里だから、どうしても去りがたい気持ちがありました」とも述べている。

▸ 長谷川泰子　広島女学校卒業アルバムより
［提供：中原中也記念館］

影響を受けた人物

高橋（たかはし） 新吉（しんきち）

明治 34(1901)年 1 月 28 日～昭和 62(1987)年 6 月 5 日

詩人・作家。愛媛県西宇和郡伊方町出身。大正 7 年八幡浜商業学校中退。大正 9 年ダダイズムに強い衝撃を受け、日本のダダイストの先駆者となる。禅や東洋精神、仏教にも深く傾倒し、詩集のほか、研究書、小説、美術論集など多数の著作をもつ。86 歳で死去。『ダダイスト新吉の詩』『高橋新吉全集』など。

大正 12 年の秋、京都丸太町橋際の古本屋で高橋の著作『ダダイスト新吉の詩』を読み、中の数篇に感激した中也は、詩作をするようになる。更に自分をダダイストと名乗り、周囲からも「ダダさん」と呼ばれていた。泰子に最初に見せた詩もダダの影響を強く受けた詩であった。

昭和 2 年、中也は詩人高橋新吉についてまとめた「高橋新吉論」という論文を書き、高橋宛に送った。その数日後の日記に「見渡すかぎり高橋新吉の他、人間はをらぬか」と記すほど、高橋に傾倒していた。翌 10 月に辻潤の紹介状を持って高橋の住む下宿を訪ね、二人の交流は始まった。二人は新宿のバーで喧嘩をして以降少し疎遠になったが、高橋は中也との交流を振り返り、「彼が現在まで生きていて、一緒にお茶をのんだり話をしたら、嘸（さぞ）楽しいだろうと、慨（なげ）かれもする」と懐かしんでいる。

アルチュール・ランボー

1854(嘉永 7)年 10 月 20 日～1891(明治 24)年 11 月 10 日

詩人。フランスのシャルルヴィルに生まれる。教育熱心な母親に育てられ、神童と期待されるほどの才覚を見せたが、奔放な行動で周囲を困らせることもあった。同時に詩作において非凡な才能を表す。「酔いどれ船」を読んだヴェルレーヌにパリへ招かれ、以降二人で放蕩生活を送る。しかしヴェルレーヌが銃弾でランボーを負傷させたことで、二人の関係は決裂。実家に戻ったランボーは詩集を出版するが、以後詩作をやめ交易や探検に専念した。

1891 年膝の骨肉腫のため、マルセイユで右脚切断の手術を受けるが、癌が全身移転し 37 歳で死去。象徴主義の代表的な詩人として知られる。『地獄の季節』『イリュミナシオン』など。

中也がはじめてランボーの作品に接したのは大正 13 年。富永太郎が中也にランボーやヴェルレーヌなどのフランス文学を教えたことがきっかけだった。中也は、ランボーの詩の翻訳を 2 冊出し、服装はランボーに倣って黒づくめであった。

中也はランボーについて、「ランボオつて人はほんとに素晴らしいんだ。(略)人が一番直接歌ひたいことを正直に実践してゐる」や、「ランボオを読んでいるとほんとに好い気持になれる。なんてきれいで時間の要らない陶酔が出来ることか！」と度々日記に綴っている。

宮沢（みやざわ） 賢治（けんじ）

明治 29(1896)年 8 月 27 日～昭和 8(1933)年 9 月 21 日

詩人・童話作家。岩手県稗貫郡花巻川口町（現・花巻市豊沢町）出身。明治 42 年盛岡中学校に入学し、大正 4 年盛岡高等農林学校に首席で入学。卒業後、親との意見の違いにより上京し、詩や童話を創作。半年ほどで妹の発病のため帰郷。以後、4 年間花巻農学校（現・岩手県立花巻農業高等学校）教諭を務める。13 年詩集『春と修羅』、童話集『注文の多い料理店』を自費出版。15 年羅須地人協会を設立し、農民に農学や芸術論を講義。昭和 3 年末に急性肺炎の診断を受け、療養生活を送る。昭和 6 年石灰を販売すべく上京するも、再び発病。晩年はほぼ病床で過ごした。37 歳で死去。著書に『風の又三郎』『銀河鉄道の夜』など。

おそらく富永太郎を通じて宮沢賢治の存在を知った中也は、自身で『春と修羅』を何冊か買って友人に配った。大岡昇平は、「知り合ったばかりの頃に渋谷の夜店のゾッキ屋で、一冊五銭で売っていた『春と修羅』を四冊ほど買い、方々に配っていた。中也が人にこんなすすめ方をした詩集は、あとにも先にも『春と修羅』だけであった」と振り返る。

同時代に生きた二人であるが、残念ながら賢治から見た中也の評価はない。しかし、中也は賢治の影響を強く受け、「夜汽車の食堂」などの童話も作成し、作品の端々に賢治の影響を見ることができる。

中也の友人関係

富永（とみなが） 太郎（たろう）

明治 34(1901) 年 5 月 4 日～大正 14(1925) 年 11 月 12 日

詩人。東京市本郷区湯島此花町（現・東京都文京区）出身。旧制第二高等学校退学。大正 11 年東京外語学校仏語科に入学。13 年、同人誌『山繭』に参加するも喀血。闘病しながら詩作や翻訳を続け、14 年発表の「鳥獣剥製所」が評判となる。同年結核により 24 歳で死去。没後『富永太郎詩集』が刊行された。

大正 13 年 7 月、富永が京都に住んでいた時、中也が富永の下宿近くに越してきた事から、二人の交流は頻繁になる。富永にフランス文学を教わった中也は「彼より仏国詩人等の存在を学ぶ」と書き記している。

二人の共通の友人である正岡忠三郎は、富永が中也の来訪を嫌がるので、危篤になっても知らせなかったと振り返る。小林秀雄と中也の確執を知らなかった富永にとって、小林に対する中也の態度は認められないものだった。「小林にいろいろ教導を受けていながら小林は駄目だなんて言う」と正岡にぼやき、中也は悪く変ってしまったと怒った。中也はそうとは知らず、話しかけても反応を返してくれない富永に対して「なにが気に入らないんだか、いってくれないんだからな。あの固い殻にはかなわない」と大岡昇平にぼやいていた。

富永の死を電報で知った中也は、二日間不眠不休で弔った。「友人の目にも、俗人の目にも、ともに大人しい人といふ印象を与へて、富永は逝った」というのが中也の富永評であった。

後日、富永の写真を山口へ持ち帰り、それを見せながら「これは偉い人だったんだよ」と小さい弟たちに何度も繰り返していたという。

青山 二郎（あおやま じろう）

明治 34(1901)年 6 月 1 日～昭和 54(1979)年 3 月 27 日

美術評論家・装丁家。東京市麻布区（現・東京都港区）出身。中学時代から骨董品に興味を持ち、昭和 7 年倉橋藤治郎と陶器の図録を刊行。骨董界で有名になる。8 年創刊の『文学界』や多数の単行本の装丁を手がけ、戦後は小林秀雄らと雑誌『創元』を編集するなど、幅広く仕事をこなした。77 歳で死去。著書に『陶経』『青山二郎文集』など。

青山が住む花園アパートには、彼を慕う人々が集まり、文学サロンの様になっていた。そのアパートに昭和 8 年 12 月、中也が妻と共に引っ越し、青山の部屋に入り浸るようになる。中也が話し役、青山が聞き役で、話は連日尽きることがなかった。中也は青山を「二ィちゃん(ジイちゃん)」という愛称で呼び親しんだが、青山は「中原は退屈すると人が食いたくなる鬼」と持て余し気味であった。中也もそんな青山に思うところがあったのか、『歴程』同人仲間の高橋幸一に「おれは二ィちゃんのことがよくわからないんだ」と話したことがあった。

しかし、中也は何かと青山を頼りにし、青山も後年、自身を「中原の必要人物の一人だった」と語るなど、中也の頼れる友人であったことを自認している。

◀『在りし日の歌』復刻版, 日本近代文学館
［中野区立中央図書館所蔵］

安原 喜弘（やすはら よしひろ）

明治 41（1908）年～平成 4(1992)年

著述家。東京市芝区(現・東京都港区)出身。昭和 3 年中也と知り合い、親交を重ねる。4 年中原、河上徹太郎、大岡昇平と同人誌『白痴群』を創刊。また日本育英会奨学部長などを歴任。84 歳で死去。著書に『セザンヌ』『中原中也の手紙』がある。

安原に中也を紹介したのは大岡昇平である。大岡によると、安原は「中也が一番頼りにし

た友人」であった。中也は安原のことを「ヤスさん」と呼び親しみ、沢山の手紙を出した。一方安原の方は、誰彼の見境なく絡む中也の世話をし、時に介抱し、無用の摩擦を避けるために神経を使い、休まらなかったようだ。「中原との出会いは、決して楽しいものではなかった。思い出は辛く、心重い日々の連続である。この間に私はいつしか文学志向を捨て、筆を折った」と振り返っている。そんな安原の気持ちも分かってか、中也は安原の悪口は決して言わなかったという。

諸井（もろい） 三郎（さぶろう）

明治 36(1903)年 8 月 7 日～昭和 52(1977)年 3 月 24 日

作曲家・教育家。東京府出身。昭和 7 年ベルリン高等音楽学校に入学。帰国後、国際現代音楽協会日本支部の設置に尽力、日本作曲家連盟委員として活躍。昭和 21 年から文部省社会教育視学官を務め、東京都交響楽団初代楽団長を経て、同 42 年洗足学園大学音楽部長に就任。73 歳で死去。著書に『音楽形式論』『機能和声法』など。

中野駅の近くに住んでいた諸井は、細い道で中也とすれ違い、その異様な服装に興味をひかれる。家に帰ると中也が紹介状持参で尋ねてきて交流が始まった。中也の家が近かったこともあり、約半年、中也は諸井の家に入り浸った。

昭和 2 年に諸井は河上徹太郎、今日出海らとスルヤ楽団を主宰。その会合に、中也は「スルヤの院外団」と自ら称し、準メンバーのように頻繁に顔を出した。中也の「朝の歌」や「臨終」などの詩は、スルヤのメンバーが作曲をした。

諸井は「お互いに藝術を熱愛していた若者が、まったく純粋に共感し合った感激を、忘れることが出来ない」と、中也との出会いを振り返る。

左：「スルヤ」第 2 回発表演奏会会場
右：『スルヤ』第 2 輯表紙
［提供：中原中也記念館］

草野（くさの） 心平（しんぺい）

明治 36 年(1903)年 5 月 12 日～昭和 63(1988)年 11 月 12 日

詩人。福島県石城郡上小川村（現・いわき市小川町）出身。大正 10 年嶺南大学に学ぶ。長兄の遺品のノートに記してあった短歌や詩に触発され、詩作を始める。大正 14 年同人誌『銅鑼』、昭和 3 年同人誌『学校』、昭和 10 年詩誌『歴程』などを創刊。同 23 年詩集『定本蛙』で第 1 回読売文学賞を受賞。85 歳で死去。著書に『第百階級』『蛙』など。

中也との交流は昭和 9 年に始まり、朗読会や飲み会などでお互いに親交を深めた。中也の死後、「ああさつぱりしたといふのは実は彼自身ではなくて、世間様だらう。それ程彼は厄介だつたと云へないことはない。それ程彼は詩人だつた」と振り返る。また草野は中也の自作詩の朗読を絶賛。「その一つだけでもレコードにしてとっておかなかったことは詩界の損失」と悔やむ程だった。「自分の知っている範囲で「独自」なという言葉に恥じない朗読をしたのは宮沢賢治と中原中也だけである」とも語っている。

中也は草野について、日記に「草野は又妙な奴」と書きながらも、草野の『母岩』に寄せた書評では「(草野君の)感覚を僕は好きだ。そのピントは実に正確だ。つまり彼は詩人として第一に大事な点に於ては決してころがりつこないのだ」と評価していた。

大岡（おおおか） 昇平（しょうへい）

明治 42(1909)年 3 月 6 日～昭和 63(1988)年 12 月 25 日

作家。東京市牛込区（現・新宿区）出身。京都帝国大学仏文学科卒業。昭和 19 年に召集されミンドロ島に従軍し生還する。終戦後から本格的に文筆活動に入り『俘虜記』『武蔵野夫人』『事件』など多くの作品を執筆し、文学賞なども多数受賞する。79 歳で死去。

東中野の小林秀雄宅で中也を紹介され知り合う。その後『白痴群』の創刊メンバーの一人となる。始めは良好な関係を築いていた二人であるが、次第に意見の相違から喧嘩をするようになり、それが『白痴群』終刊の理由の一つとも言われている。

そんな一見仲の悪そうな二人の交流は、中也が亡くなるまで続いた。大岡は中也との関係について、「原則として中原とは遠慮せずに喧嘩する方針にしていた。そのうち彼が何を言

おうとも平気でいられるようになったら、喧嘩はやめて、茶呑話の相手になってやるつもりだった。僕はそういう日が来るのを待ち望んでいたのだが、その日が来ない前に、中原に死なれてしまった」と言い、中也の死を惜しんだ。

中也の死後、大岡は様々な書籍で中也のことを書いているが、そのきっかけは戦地に向かう前、ふと思い立ったように再読した中也の詩であった。不思議と心に沁みた中也の詩を、大岡は戦地でも口ずさみ、軍隊生活を耐え忍んだと言う。そして復員後、小林の手元にあった遺稿を読んだ大岡は、そこに中也の知らなかった一面を見て驚き、以後中也と親交のあった者達の元へ赴いては中也に関する情報を集め始めた。

しかし大岡は、自身が綴った中也に関する記述について、常に留保つきであり読む人に不確かな印象を与えていると語っている。その理由として、「中原の天才が私にないため、彼の精神に真直に入って行くことができないのである」と「在りし日の歌」の中で書いており、大岡がいかに中也の非凡な才能を認めていたかがわかる。

河上（かわかみ） 徹太郎（てつたろう）

明治 35(1902)年 1 月 8 日～昭和 55(1980)年 9 月 22 日

評論家。長崎県長崎市生まれ。東京帝国大学経済学部卒業。中也とともに『白痴群』を創刊し、『自然と純粋』『思想の秋』などの著作を刊行する。多くの評論、エッセイを残しており、昭和 37 年芸術院会員に推され、47 年文化功労者となる。78 歳で死去。著書に『厳島閑談』『私の詩と真実』などがある。

昭和 2 年、小林秀雄の紹介で中也と出会う。その後、二人が文学的に交流をもったのが、同人誌『白痴群』であった。河上は創刊に意欲を示して編集発行人として名を連ねている。ちょうど「文学に目覚めつつあった」河上は、連日家にやってきた中也からいやおうなしに話を聞かされた為、中也から多大な影響を受けたという。

河上にとって「その奇行を以て身辺の者を一人残らず悩ました」中也という人物は、その作品よりも興味深いものであった。中也の性質は、「彼の人物の魅力も嫌悪も実にユニークなもので、それは彼の個性的な或る癖の両面に同時に発生する、一種の精神の光沢のような

もの」であり、そんな「彼の反語に満ちた存在を少しでも正確に世間に紹介すること」が、自身の批評家的義務であると河上は語っている。

中也と暮らした友人

関口（せきぐち） 隆克（たかかつ）

明治 37(1904)年 5 月 1 日～昭和 62(1987)年 12 月 18 日

教育家。東京市本郷区曙町（現・文京区）出身。東京帝国大学社会学科卒業。文部省に入り国立教育研究長などの要職を歴任後、開成学園にて理事を務め、同中学高校それぞれの校長を務める。行政や教育分野で活躍。83 歳で死去。

芸術団体「スルヤ」に所属。スルヤの中心人物だった諸井三郎の紹介により、中也と知り合う。数回の会合を経た後、中也が押しかけるように関口の住む家に来て「ボクはここに棲もうと思う。もうきめたんだ」と言って関口を驚かせ、そのまま共に暮らし始める。中也が押しかける前から関口と同居していた旧友の石田五郎を含めた三人での共同生活は、生活リズムの違いもあったが住む家が変わっても続いた。その後中也が移り住む鎌倉の家探しも、関口は共に行った。中也が悪口を言わず褒めていたという数少ない人物。中也への見舞いにもよく赴き、通夜・告別式では葬儀執行委員の中心となって動いた。

高森（たかもり） 文夫（ふみお）

明治 43(1910)年 1 月 20 日～平成 10(1998)年 6 月 2 日

詩人。宮崎県東臼杵郡出身。東京帝国大学仏文学科卒業。高校時代に詩作を始め、昭和 16 年に処女詩集『浚渫船（しゅんせつせん）』で第 2 回中原中也賞を受賞。この作品は出版された昭和 12 年に中也自身が雑誌『四季』へ紹介文を載せた作品である。文学だけではなく故郷宮崎県で教育長、東郷町長なども務めた。88 歳で死去。

『白痴群』で中也の詩に惹かれていた高森は、中也との初対面での印象を「難破船からはい上がってきた船員」と綴っている。

同人雑誌『半仙戯(はんせんぎ)』の創刊メンバーの一人であり、中也をメンバーに誘ったのは高森であろうと言われている。高森と中也の親交が最も深かったのは高森が学生の頃で、現在の大田区北千束にあった高森の伯母の家で同居していた。また、中也は高森の弟･淳夫とも約１年間共に暮らした。

同居を解消してからも高森は中也のことを気にかけており、中也のノイローゼが激しい時期には、帰省するまで世話をしたこともあった。

中也という人間

関口隆克ら友人の多くが口々に証言しているように、中也は訪問魔であった。訪問される側は、連日訪れる彼にやがて辟易した。また酒の席ですぐ人を罵り絡み殴るので、長く親しくするのが難しい人物であったようだ。そうして一つの繋がりが絶えると、中也は他の人物のもとを訪れ、結果交友が広がっていった。一方で、二人きりで話している間は酔っても大変おとなしく優しかったともいい、彼の葬式を執り行い、その詩を広めたのも友人たちだった。遺稿を預かり出版した小林秀雄、装丁を手がけた青山二郎、全集の編集に携わり自身の全集で１巻分を占めるほどに中也について書き続けた大岡昇平、中也と唯一といってよいほど長く付き合い、彼からの手紙を数多く保存した安原喜弘。人間関係においては不器用な中也だったが、彼の作品は彼の全てを魅力に変え、現在も新しい読者を獲得し続けている。

中也が関わった同人雑誌

上京後、中也の書いたものが初めて掲載された雑誌は『山繭』の大正15年11月発行号である。音楽集団スルヤの機関誌に詩や評論を発表した後、昭和４年に自ら同人誌『白痴群』を創刊。中也にとって重要な発表の場となるが、翌年、６号で廃刊となった。その後、『紀元』や『半仙戯』には積極的に参加しているが、昭和9年には『紀元』を脱退、『半仙戯』も同年に刊行を停止しているようで、『鷭』『青い花』と短命な雑誌に寄稿している。この年の末に処女詩集『山羊の歌』を公刊すると、中也の詩名は広がりを得た。翌10年、『文學界』編集長に『山繭』掲載前からの付き合いとなる小林秀雄が就き、『四季』や『歴程』に誘われ、安定した発表の場を得るが、中也の寿命はそう残ってはいなかった。

凡例

雑誌名
発行地
（中野区と判明している場合のみ）
刊行年

主な同人
★→中野区に住んだことが確認できている人物

雑誌名	発行地	刊行年	主な同人
山繭		T.13～S.4	富永太郎 ★小林秀雄 など
スルヤ		S.2～5?	★諸井三郎 河上徹太郎 内海誓一郎 など
白痴群	（中野区）	S.4～5	村井康男 阿部六郎 大岡昇平 富永次郎 河上徹太郎 内海誓一郎 ★古谷綱武 安原喜弘
椎の木	〈第三次〉（中野区）	S.7～11	★百田宗治 ★伊藤整 ★三好達治 ★丸山薫 など
半仙戯		S.8～9?	石川道雄 ★高橋新吉 ★高森文夫 など
紀元		S.8～14	坂口安吾 安原喜弘 など
文学界		S.8～19	川端康成 ★小林秀雄 など
鷭	（中野区）	S.9	檀一雄 ★古谷綱武 など
青い花		S.9	太宰治 檀一雄 安原喜弘 など
四季	〈第二次〉	S.9～19	堀辰雄 ★三好達治 ★丸山薫 など
歴程		S.10～	草野心平 ★高橋新吉 など

参考文献：『現代詩誌総覧 1』　現代詩誌総覧委員会/編, 日外アソシエーツ, 1996
『日本近代文学大事典』第五巻　日本近代文学館/編, 講談社, 1977
『近代文学雑誌事典』長谷川泉/編, 至文堂, 1966

中也の外見

黒マントに黒い帽子のスタイルは、中原中也の代名詞といっても過言ではない。

その特徴的なスタイルは、中也が最も尊敬し、生涯翻訳に取り組んだ詩人・ランボーの姿を模したものであった。長髪と黒づくめの外見は、周囲の人間の印象に強く残ったようで、中也の外見について、多くの人が記録を残している。

彼は黒いマントをひっかけ、黒いソフト帽のような帽子をかぶり、鋭い目をし、かみつくような顔をして、向こうから歩いて来た。
（「中也に初めて会った日のこと」『中原中也研究』より）

諸井 三郎

よごれたゴムまりをぬれ雑巾でひと拭きしたような顔をしていた。それに、つばの狭い黒のソフト帽をのせ、つりがねマントを着ていたかも知れぬ。（略）初印象は、なにか、いたく不吉な感じであった。　（「中原中也」『永井龍男全集 第11巻』より）

永井 龍男

一時はピエロのズボンみたいなのをはいていました。お尻のところをダブダブにとり、足首のところをきゅっと細くしたズボンです。（略）その上に、釣り鐘マントはおっていました。そのマントはとてもよい生地で、肩のところにはたっぷりギャザーをとり、丈はひきずるほど長かったんです。（『ゆきてかへらぬ 中原中也との愛』より）

長谷川 泰子

顔も柄もランボーそっくりだったし、人をまず馬鹿にして、喧嘩早くて、臆病で、それでいて本当だった。（略）黒いソフト帽を被り、黒いマントを烏みたいにばたつかせている、白い子供のような中原の顔が浮かび出た。
（「中原中也のこと」『新編中原中也全集 別巻下』より）

高田 博厚

その日彼は黒のルパシカに五尺に足らぬその体を包んで黒のお釜帽子をかぶり『スルヤ』の発表会の切符を持って私の前に現れた。このいでたちは当時彼の制服であり、後にルパシカは黒の背広に代えられ、更に後にはお釜帽子が黒ベレーに代えられたのである。冬にはこれもやはり黒の外套がその身を包んだ。
（『中原中也の手紙』より）

安原 喜弘

眼が悲しくて薄す気味悪かったが、特に閃いたことも言わず、動物的な体臭のある市井の年少詩人だった。
（「訪問魔中原中也」『新編中原中也全集 別巻下』より）

小出 直三郎

中也の身長は、5 尺（約 150cm）程で、小柄かつ華奢な体格であった。中也は服装にこだわりを持っており、上京する前から特徴的な外見をしていたようだ。母親フクや弟の思郎によると、中也は度のないメガネやサングラスをかけたり、中学校の制服の帽子を変形させて蝋をぬったりしていたという。

また中也は自身について、「私には、体につけるものとして黒以外は決して似合わないやうな、よくとればスケエルの大きい人のそれがある」と日記に書いている。

▲ 立命館中学 3 年生の中也。右は山口中学校時代の家庭教師村重正夫。中也が帽子を変形させているのがわかる。

母フクは著書『私の上に降る雪は』で、「はじめての夏休みには、中学校の制服で帰りましたけど、帽子はなにやらプーッと上のほうに引っぱりあげて、蝋をぬったりなんかしておりましたね」と語っている。

［提供：中原中也記念館］

▶ 中也の帽子レプリカ
［提供：中原中也記念館］

文房堂（ぶんぼうどう）～中也の使った原稿用紙～

中也が使った原稿用紙は60種類。その中で中也が最も多く使っていた原稿用紙は文房堂のものだった。今回復刻版を発売した文房堂の取締役社長・広瀬俊道さんにお話を伺った。

文房堂の歴史

池田治朗吉が明治20(1887)年に創業。合名会社として四代目まで代々治朗吉を襲名していく。輸入文具の取扱をメインに行っていたが、文房堂オリジナル商品の開発・販売も開始。また福沢諭吉に西洋美術の輸入販売を勧められ、文房具だけでなく美術用品の品揃えも豊富となった。明治39年に現在の千代田区神田神保町に店舗を新築。大正11年 現在の社屋(外壁)完成。当時では珍しい鉄筋造りであったおかげで震災や戦火をくぐりぬけた社屋は、レンガ造りの外観をそのまま残し、背面の建物を建て替える特殊工法で現在まで保存されている。中也が訪れていた大正から昭和にかけて文房堂には、たくさんの文士や画家を目指す学生が足を運んで文具や画材を買い求めた。

▲ 外壁補修直後の文房堂外観(2003年)
［提供：株式会社文房堂］

――中原中也の原稿用紙を復刻した理由を教えて下さい。

文房堂約130年の歴史の中で、原稿用紙や大学ノート、五線紙などの商品は一番初めの文房具店の時からありました。社内で伝えられている話もありましたが、最近はインターネットでも文房堂に関する資料が出てきます。そこで、以前作っていた商品で色んな作家さんも

使用していたものを実際に見てもらおうと、大学ノートや原稿用紙の復刻を作ろうという話になりました。その中でも中原中也は若年層にも読まれ、ネームバリューがある詩人として社内から最初に復刻の声が上がりました。私も中学や高校の時に読んだりしていて、若い年代に響くものというか、近いものがあるんでしょう。若くして亡くなった作家さんや絵描きさんは人気もあるので、若い頃は見る側の憧れのようなものもあるんでしょうね。

――表紙に使われている作品は、どのように決めましたか？

中原中也記念館の学芸員の方が色々と協力してくれました。表紙に使っている写真や『春』の詩以外にも直筆原稿を見せていただきました。表紙に使う原稿選びで私は『朝の歌』の原稿が、書いて消して勢いのある原稿だったので、これで作ると面白いかなと思ったんですけど、修正跡などがない綺麗なものの方がいいという話に社内でもなりまして、現在の形になりました。

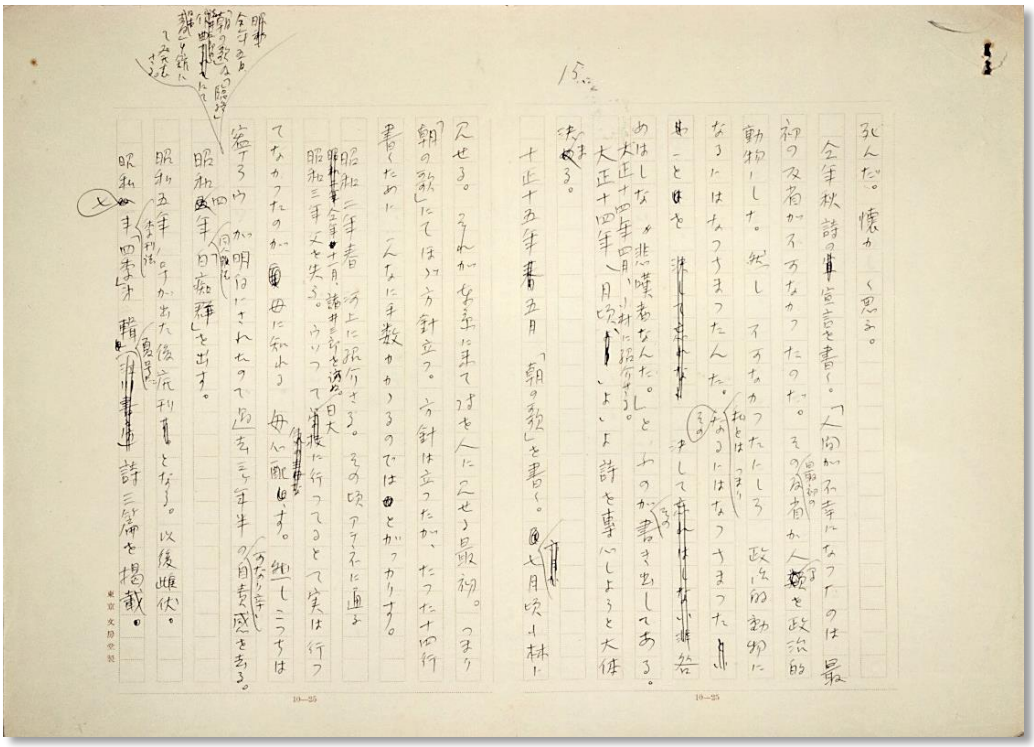
▶ 中原中也の復刻版原稿用紙
［写真：文房堂にて、職員撮影］

――完成までの苦労などありましたら教えて下さい。

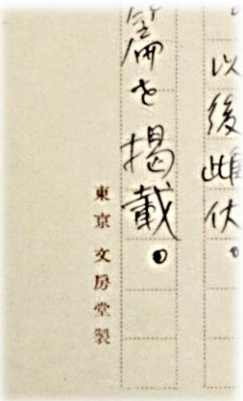
昔の原稿用紙は字数、寸法、余白の幅、枠線の色まで物によって様々な違いがあります。近いものもありますが、過去の原稿用紙すべてを復刻させようとすると、細かくオーダーする必要が出てきてしまい、コストも上がってしまいます。また現代は原稿用紙が使われる機会は少なくなってきていますので、発行部数もあまり多くは作れません。在庫やコストの問題に加えて、印刷会社によっては 2000 部からならやってくれる、という所もあります。実際に刷ってくれた会社は、うちが別の印刷関係を頼んでいたところなんです。こちらの条件を受入れてくださって、そこからトントンと話が進みました。用紙もその会社がお持ちの数種類の中から選んでいます。そんな風に一緒に丁寧に作ってくれる所を探すのが一番大変かもしれませんね。

――商品を手掛けるために必要なものはありますか？

これだけは作っておきたいという担当者の熱意や文房具愛が強くないと、こういうものをこういう風に作りたいという発案とか、この原稿用紙なら紙の種類はどうしようとか、考えられないと思うんです。中也の原稿用紙も完成まで 3 年かかっています。色々なところに交渉に行ったり時間がかかったりしても、続けられる人がいないと難しいと思います。



▲ 昭和 11 年、文房堂の原稿用に書かれた「我が詩観 詩的履歴書」直筆原稿
［提供：中原中也記念館］



◀ 左下には「東京 文房堂製」の文字が見える

中也の引越し先一覧

在住の期間（推定）	当時の住所
①1925(大正 14)年 4 月 15 日ー5 月中旬 ～1925(大正 14)年 5 月中旬ー下旬 （約 1 ヶ月）	東京府豊多摩郡中野町大字中野小字打越 1985 永島方 （現：中野区中野 5-45-46、あるいは 5-56-5）
②1925(大正 14)年 5 月中旬ー下旬 ～1925(大正 14)年 11 月下旬 （約 6 ヶ月）	東京府豊多摩郡杉並町大字高円寺 249 若林方 （現：杉並区高円寺南 2-49）
③1925(大正 14)年 11 月下旬 ～1926(大正 15)5 月 （約 6 ヶ月）	東京府豊多摩郡中野町大字中野小字桃園 3398 関根増五郎方 （現：中野区中野 3-1-3、あるいは 3-4-8）
④1926(大正 15)年 5 月 ～1926(大正 15)10 月 （約 6 ヶ月）	東京府豊多摩郡中野町大字中野小字桃園 3465 篠田方 （現：中野区中野 3-24-32）
⑤1926(大正 15)年 10 月 ～1926(大正 15)年 11 月 （約 1 ヶ月）	東京府豊多摩郡中野町大字中野小字上町 （現：中野区宮園通 4、あるいは本町通 3～4、 または中野区中央 3～4）
⑥1926(大正 15)年 11 月 ～1928(昭和 3)年 9 月 （約 1 年 10 ヶ月）	東京府豊多摩郡中野町大字中野小字桃園 3398 関根増五郎方 （現：中野区中野 3-1-3、あるいは 3-4-8）

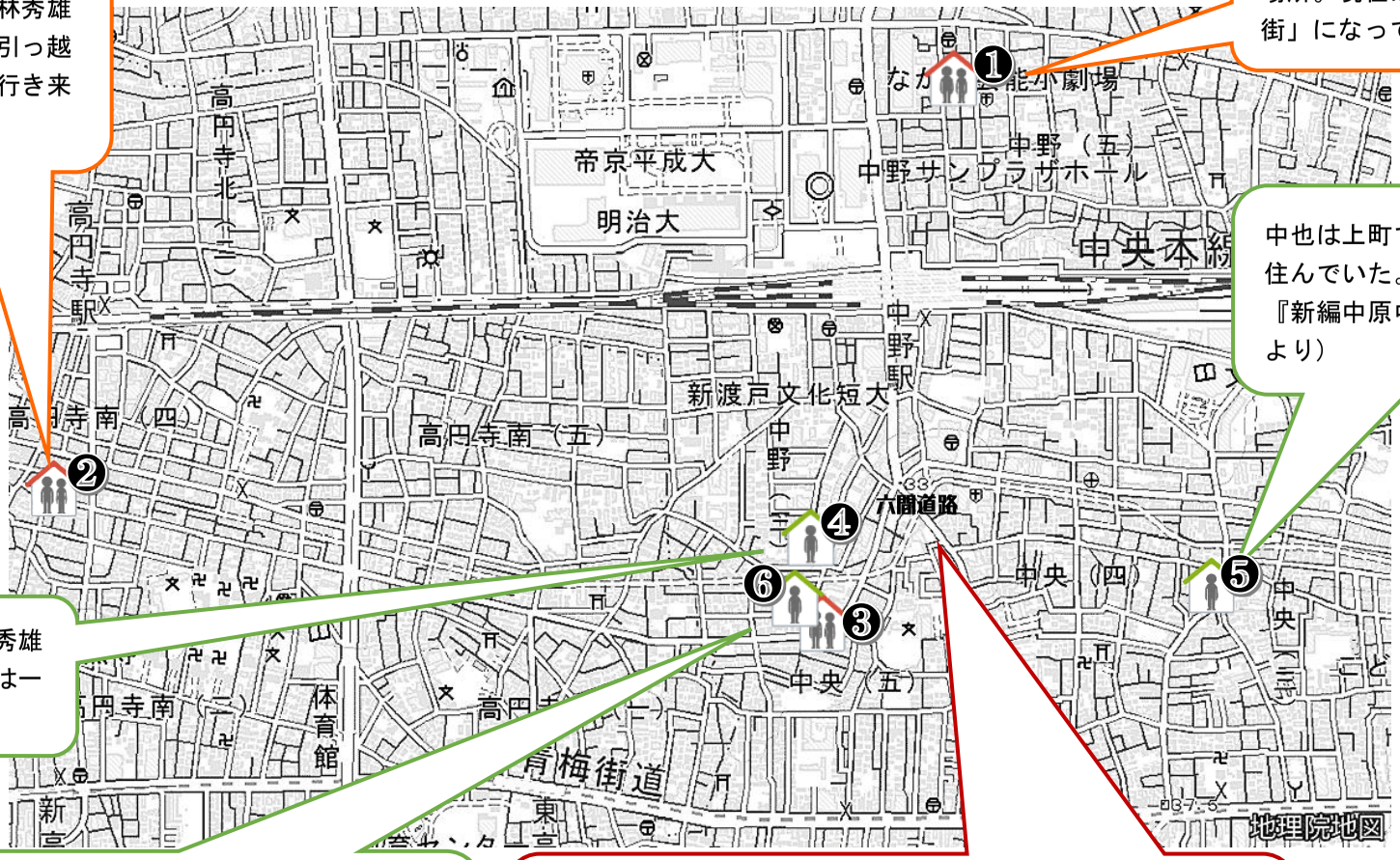
※番号は次ページの「中也の中野暮らし地図」と対応しています。

参考文献：『新編 中原中也全集 別巻(上)』中原中也/著, 角川書店, 2004

中也の中野暮らし地図

高円寺にある、小林秀雄の住まいの近くに引っ越す。お互いによく行き来していた。

中也が中野で初めて暮らした場所。現在は「昭和新道商店街」になっている。



中也は上町で理髪店の二階に住んでいた。（「自筆住所録」『新編中原中也全集 第４巻』より）

▲ 鎌倉の家で使用した自筆の表札
［提供：中原中也記念館］

長谷川泰子が小林秀雄の元へ去り、中也は一人に。

「下宿の横に蓮池があって、私には、『蓮の葉は、図太いので　こそこそとしか音をたてない。（「黄昏」）』の句は、この下宿と切離しては考えられず」
（「朝の歌」『大岡昇平全集 第 18 巻』より）

「新しく出来た六間道路とその辺の者が呼んでゐる通りには、まだギャレッヂと雑誌屋と玉突場とがあるきりだつた」
（※六間道路は現在の中野通り）
（「古本屋」『新編中原中也全集 第４巻』より）

中也が長谷川泰子と暮していた場所

長谷川泰子が去り、一人暮しをしていた場所

中せが住んだ街の現在

① 打越町（現：中野 5 丁目）

昭和新道の東側は静かな住宅地で雰囲気のある医院などが残されている。増改築されているが大正期の洋館部分がそっくり残されているものや、当初の凝った洋風意匠の玄関部分を残している住宅などもある。

早稲田通りには意匠の似た看板建築が建ち並んでいたり、ビルの裏側には土のままの路地に面して 2 軒長屋が時代に取り残されたように建っている。

⑤ 上町（現：中央 3～4 丁目）

中央 4 丁目のほぼ真ん中から東側（上町）は戦災焼失地域とされているがこの中にも戦前と思われる建物が 25 棟ほど確認された。上町の旧家の主屋（明治期）と離れ（昭和初期）は、敷地内の大きな樹木によって火災を免れたという。

4 丁目のほぼ中央に質の高い戦前の住宅が 4 軒まとまって立地し、貴重な景観が保たれている。

③ 桃園町（現：中野 3 丁目）

大きい区画の宅地はマンションになったり宅地の細分化も見られるが、かつて医院だった洋風建築や質の高い戦前の建物が残されている。昭和 4 年（1929）の洋館と昭和 8 年（1933）の近代和風建築が隣り合って存在するなど歴史的景観が保たれている。

引用：『中野を語る建物たち』伝統技法研究会/制作, 中野区教育委員会, 2011

※2019 年現在、引用した上記資料の記述よりさらに風景が変わっている場合があります。

中也の中野暮らしをたどる

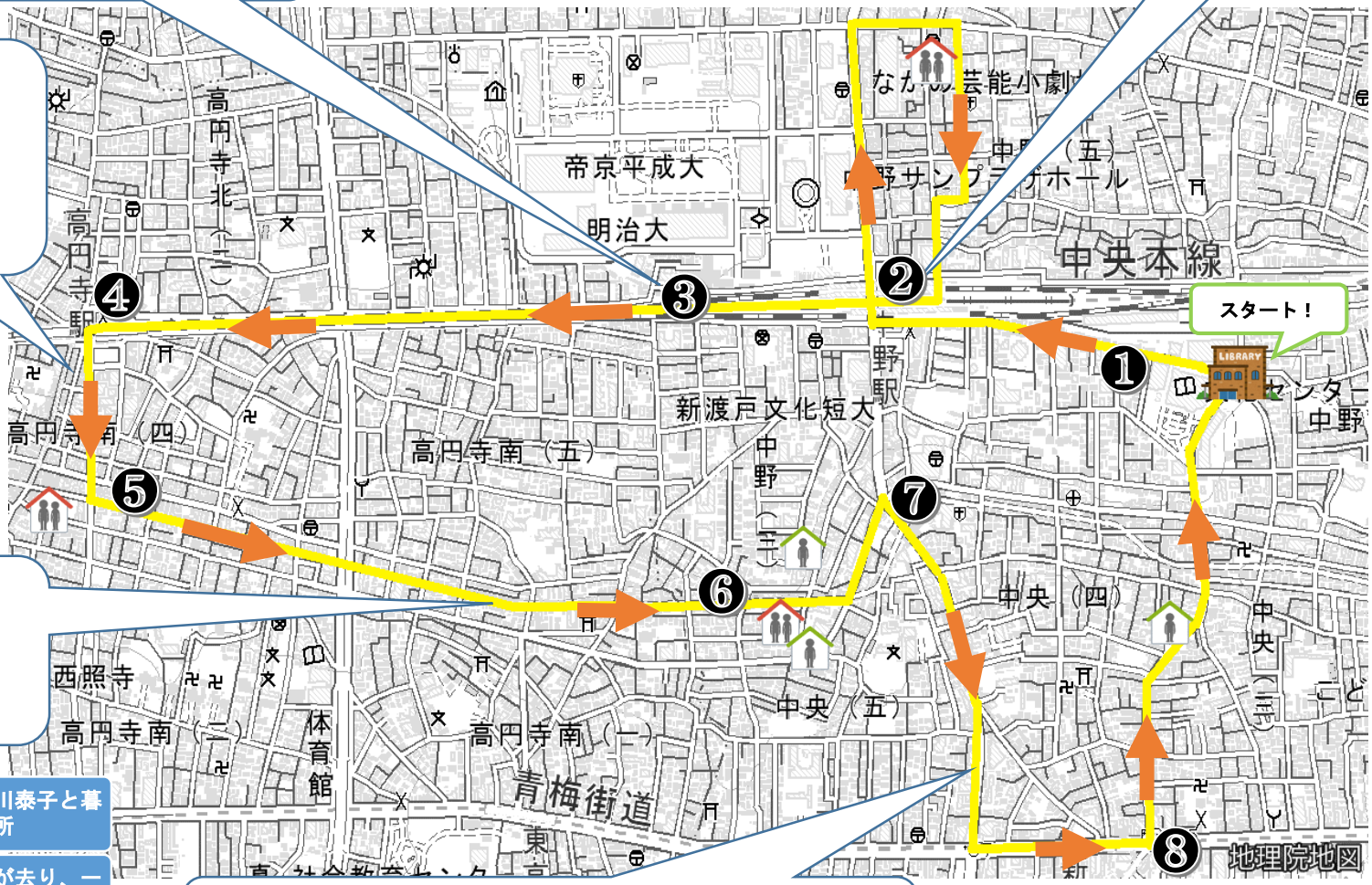
中野区立中央図書館から、中也が暮らしていた場所を時系列に沿って辿っていくコースです。
中也が暮らしていたころとはずいぶん景色が変わりましたが、当時の中野へ想いを馳せながら、中野を歩いてみませんか？

中央線中野駅から高円寺駅まで
約 1.4km 電車で約 2 分

ここまで約 1.8km
徒歩で約 30 分

高円寺駅南口から
「桃園川緑道」の
入口まで歩く
約 260m
徒歩で約 4 分

「桃園川緑道」を
道なりに進む
約 1.3km
徒歩で約 20 分



中野通りを通り、青梅街道まで歩き左折、鍋屋横丁前を左折、図書館まで。約 1.8km　徒歩で約 30 分

全距離 約 7km
所要時間　約 84 分　（徒歩 82 分、電車約 2 分）
参考：Google マップ ルート検索

中也が長谷川泰子と暮していた場所

長谷川泰子が去り、一人暮しをしていた場所

現在の中野区立中央図書館の場所

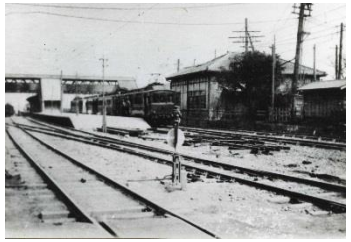
スタート！

❶ ▲ 千光前通り

▲ 現在の中野駅北口側から見た中野通り

❷ ▲ 昭和７年　中野駅北口大通り・拡張工事完成　［提供：中野区］

▲ 北口の歩道橋から見た中央線ホーム



❸ ▲ 大正時代の中野駅構内　［提供：中野区］

▲ 高円寺駅南口から見た高南通り

❺ ▲ 大正 13 年　高円寺駅から南方を望む　［提供：杉並区立郷土博物館］

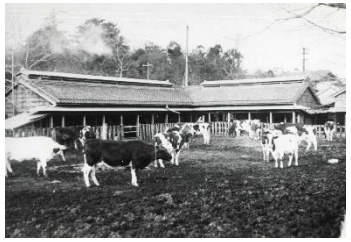
▲ 現在の高円寺駅北口

❹ ▲ 昭和初期の高円寺駅北口　［出典：『躍進の杉並』］

▲ 中野３丁目付近の大久保通り

❻ ▲ 大正時代の桃園町付近　［提供：中野区］

▲ 中野通り五差路付近



❼ ▲ 昭和４年　原科牧場（現・中野二丁目）　［提供：中野区］

▲ なかの ZERO 入口

▲ 青梅街道と鍋屋横丁入口附近

❽ ▲ 昭和初期　青梅街道沿いの鍋横商店街　［提供：中野区］

ゴール！

中也と鉄道

中也の母フクは日本最初の鉄道始発駅のあった横浜で生まれ育った。フクの父中原助之が、語学力を活かして工部省（鉄道省の前身）鉄道局に勤めていたために、一家で鉄道役所の敷地内の鉄道官舎に住んでいた。フクは幼少期から汽車を見て育っている。

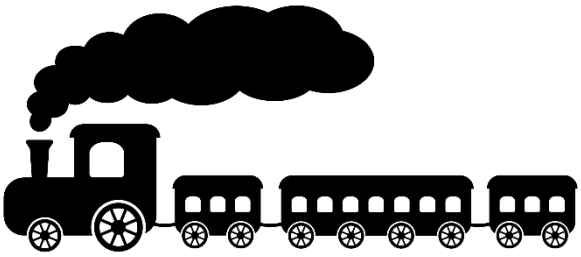
そんなフクに育てられた中也は、幼い頃は汽車をみると喜び、だいぶ大きくなってからも、汽車にはとくに興味をもっていたようだ。長男文也に汽車のおもちゃを買い与え、また長谷川泰子の息子である茂樹にも、「今月末は金に少し余裕がある筈なので、汽車の玩具でも買ってやらうと思います」と汽車の玩具を買いあたえている。

東中野に住んでいた長谷川泰子の家に、荻窪から朝一の中央線で向かったこともある。泰子はそんな中也をうっとおしく感じ、ぴしゃりと戸を閉めたこともあったと語る。

また、小説「古本屋」では、中野に住んでいる間、電車賃がないとどこへも行けない悲痛な気持を主人公安宅に代弁させている。

中也の作品には、汽車や電車がよく登場する。これについて、日本近代文学研究者の太田静一は、「中也詩中“電車”と“汽車”の意義」の中で、「「電」関係のものは中也にとってピリピリするもの。あまり好ましくないものとして使われており、汽車は懐かしいもの、親しいものとして書かれている」としている。

中也が中野に住んでいた時代は、中央線には汽車も電車も走っていた。中也はどの様な気持ちで中央線を眺めていたのであろうか。



中也の上京　―山口県湯田駅から中野駅まで―

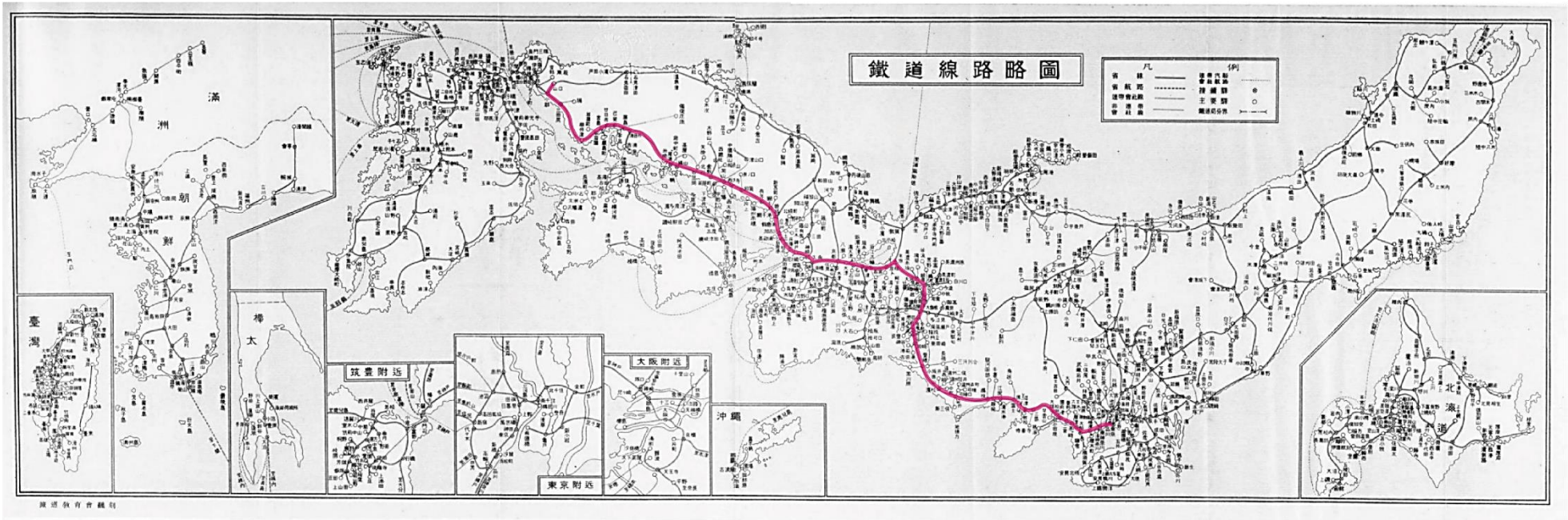
大正 14 年 3 月、中也は泰子とともに上京するが大学受験に失敗しいったん帰省する。そして、1 年間東京に住んで予備校に通う許可を得て 4 月に再び上京した。

残念ながら中也がどの列車を使って上京したのか記録はないが、当時の時刻表を元にその足取りを想像してみよう。

最寄りの山口線湯田駅を 10 時 52 分に出発すると小郡駅には 11 時 13 分に着く。11 時 24 分発の山陽本線に乗り換えると列車はそのまま東海道本線に乗り入れ、東京駅到着は翌日 12 時 15 分。ちなみに小郡で乗るこの列車には寝台車と食堂車が連結されている。

東京駅から中野駅までは中央本線。昼間は 6 分ごとに運転されており、乗車時間は 40 分。湯田から中野まで、約 14 時間の列車の旅であった。中也はその後、度々列車で帰省した。随筆「三等車の中（スケッチ）」では車内や車窓の様子を素画風に書きとめている。

参考文献：『時刻表復刻版 戦前・戦中編-1』ＪＴＢ, 1999
『鉄道の文学紀行』佐藤 喜一/著, 中央公論社, 2006



▲ 中也の帰省ルート想像図

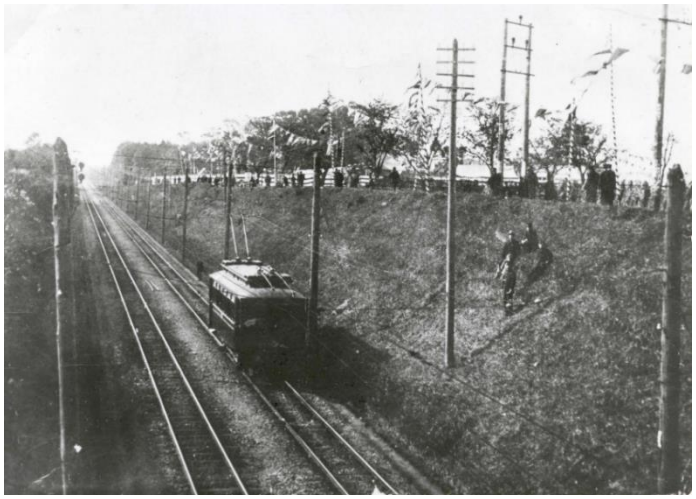
［『鉄道停車場一覧 昭和 2 年版』鉄道省/編纂, 鉄道教育会/発行　（国立国会図書館デジタルコレクションより）を一部加工］

中央線と中野駅

中央線の歴史

明治 5 年、新橋・横浜間に日本初の鉄道が開業した。その後明治 20 年に公布された私設鉄道条例により、鉄道の建設は盛んになっていく。

現在中央線と呼ばれる鉄道は、明治 19 年「甲武馬車鉄道」が新宿から八王子間の馬車鉄道の運行を申請したことに始まる。その後、蒸気鉄道に計画を変更し、社名を「甲武鉄道」と改称。明治 20 年 3 月 5 日に新宿から八王子間の建設が許可された。



▲ 大正初期　中央線（甲武電車）東中野駅付近
［提供：中野区］

中央線のルートは当初、交通の要所であった青梅街道や甲州街道沿いのルートが計画されていた。しかし、地域住民による反対運動が起こったため、当時人家や障害物が少なく土地の買収が比較的容易であった現在のルートに決まった。中野から立川間の一直線ルートに至った理由について、担当者がヤケ気味に引いた線が採用された、などの説もあるが真偽の程は定かではない。

工事は急ピッチで進められ、着工からわずか 10 ヶ月後の明治 22 年 4 月 11 日に新宿から立川間が開通した。間には社寺仏閣や景勝地があり比較的多くの利用が見込める、中野、境（現･武蔵境）、国分寺の 3 駅が設けられた。同年 8 月 11 日には立川から八王子間が開通し、新宿から八王子間を 1 時間 55 分で繋いだ。

明治 37 年 8 月には飯田町から中野間で、日本初の鉄道専用線路での電車運転が開始し、後に国鉄電車の元祖と言われるようになる。明治 39 年 10 月 1 日、甲武鉄道は鉄道国有法によって買収され、私鉄の「甲武鉄道」から国有鉄道の「中央線」となった。

大正 3 年に東京駅が開業、それに伴い大正 8 年中央線の乗り入れが始まる。その利便性の良さから沿線は農村から市街地へと発展していき、中央線は次々と駅の開業や複線化が

進められていった。そして大正 12 年、関東大震災により都心部からの移住や転入が増え、沿線の市街地化が加速していくこととなる。

戦後、被害が比較的軽微であった中央線は復興も早く、ベッドタウンとしてますます人口は増えた。比例して鉄道利用客も増加の一途を辿り、朝の通勤ラッシュが話題となる。これに伴い昭和 32 年、中央線の代名詞とも言えるオレンジ色の高性能通勤電車 101 系が登場した。

その後、昭和 62 年に国鉄の民営化が行われ、中央線は東日本旅客鉄道（JR 東日本）の管轄となり、現在に至っている。

中野駅の歴史

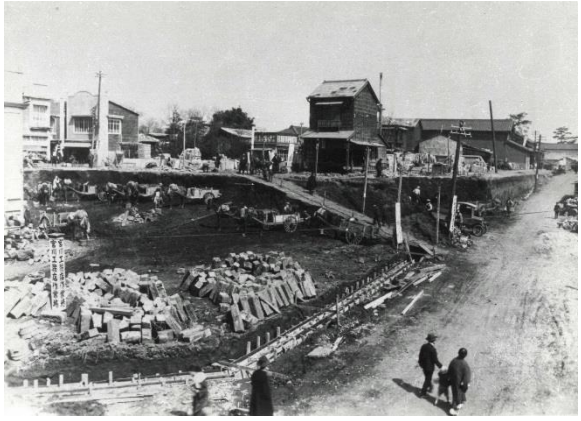
中野駅は、中央線開通当時からある最古参駅のひとつで、明治 22 年 4 月 11 日に開業した。当初、中野駅は現在よりも 100 メートルほど西側の桃園町（現･中野 4 丁目）あたりに作られ、南側の桃園通りが駅前通りとなっていた。新宿駅から 2.75 マイル（約 4.2 キロ）で、駅を置くのに調度いい距離にあった中野駅は、新井薬師や妙法寺の参拝客の利用も見込める駅として開設された。明治 35 年、駅の北側に軍事施設が出来たことによって、駅周辺は発展を始める。

▲ 明治 40 年頃の中野駅舎　［提供：中野区］

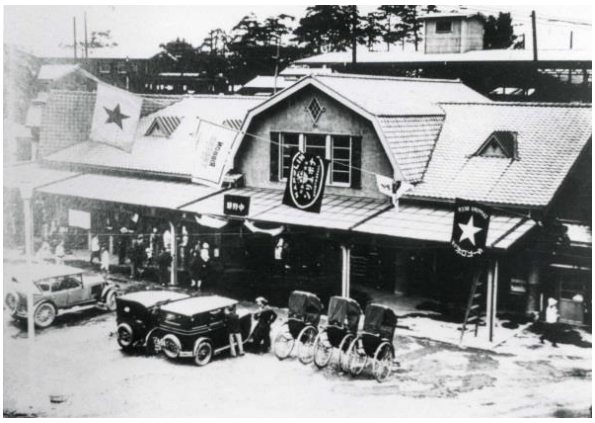
大正 10 年、新宿にあった車庫を移転拡張して中野電車庫（後の中野電車区）ができ、現在もその名残をとどめている。

大正 12 年頃になると、関東大震災により新宿以西の沿線には移住・転入する人達がおしよせ、鉄道の利用者数も急激に増加した。そのため、小さな駅舎では利用者の対応が追いつかず、昭和 4 年 11 月、現在の場所に中野駅が移転開業した。駅を移動させる際、駅前広場や商店街の敷地を確保するため、東西 130m、南北 150m、深さ 4mにわたって土地の掘り

下げが行われた。その際、北側にあった中野通りが南側まで繋がった。掘り下げ工事と駅前広場の整備は、昭和 20 年代半ばまで続いた大掛かりなものであった。



▲ 昭和 3 年　中野駅北口広場拡張工事
［提供：中野区］



▲ 昭和 4 年 全面改築された中野駅
［提供：中野区］

その後も昭和 41 年の営団地下鉄（現・東京メトロ）東西線乗り入れや、線路の複線化が次々と進められ、中野駅は 4 面 8 線の大きな駅となった。現在、中野駅周辺では、新たな駅ビルの開業を含む、大規模な都市再生整備の計画が進んでいる。今後は、中野区の中心であるだけでなく、多摩地区から都心へ向けた東京の活動拠点として、大きく変貌していくことになるだろう。

文豪が書く中野と中央線

中野から先を汽車で通る度に左様(そう)思ふが、のんびりとした地勢に耕地と耕地の續いた工合(ぐあい)は見たばかりでも心地が好い。土の色の感じも柔かい。山の上の麥畠(むぎばたけ)なぞは深い雪に埋もれて居る頃に、ここには殘雪の塊すらなく、麥(むぎ)の芽の豊かに延びて青々としたのを見るも樂しい。信州あたりの耕地に思比べると、まるで庭園のやうな氣がする。野に出て麥(むぎ)の根を踏んで居る人達まで農夫とは思へない。園丁だ。

尤も私は大久保邊(あたり)のことしか知らないから、一概に東京の近郊が皆な左様(そう)だとも思はないが、私の接して見た人達で言って見ると、純粹に獨立した農夫といふよりも寧ろ都會に向かつて野菜を供給する人達――言はば野菜作りといふ方に近いことが分かつて來た。

このことを中野に住む蒲原君に話したら蒲原君も矢張(やはり)そんなやうなことを言つて居た。中野邊(あたり)の人達でも百姓としての面白味は薄いといふ話だつた。

島崎 藤村『後の新片町より』（大正二年発行）より抜粋

堀の内と新井の薬師とは、中央線の鐵路を隔てて相対抗してゐる。この界隈―ことに柏木から中野にかけては、都會の空気の膨張して来ること夥(おびただ)しく、此頃では、邸宅別墅(べっしょ)相望むといふ風である。柏木停車場附近などにも、こんなところにこんな家が出来たかと思はれるほどの料理屋などがある。

中野停車場から新井の薬師へ行く道もすつかり俗了されて了つた。もとのような草薮もなければ、林もなくなって了つた。しかしその反対に、社殿の門前は益々賑やかになつて行つたやうである。今では、堀の内よりも、却つて此方の方が盛になつたやうにすら思はれる。この北数町、和田山に井上博士の哲学堂がある。

堀の内の堂はしかし立派だ。郊外にもこの位のものはちよつとはないと思はれる位だ。十月になると、さびしい武蔵野の中に、賑かな題目の太鼓の音が響いて、それが何とも言はれない哀愁を人の胸に起させる。十二社から、神田上水に沿うて、堀の内に行く路は、秋は好い。上水に沿つた草原から黄熟(おうじゅく)した稲田が続いて見渡される。

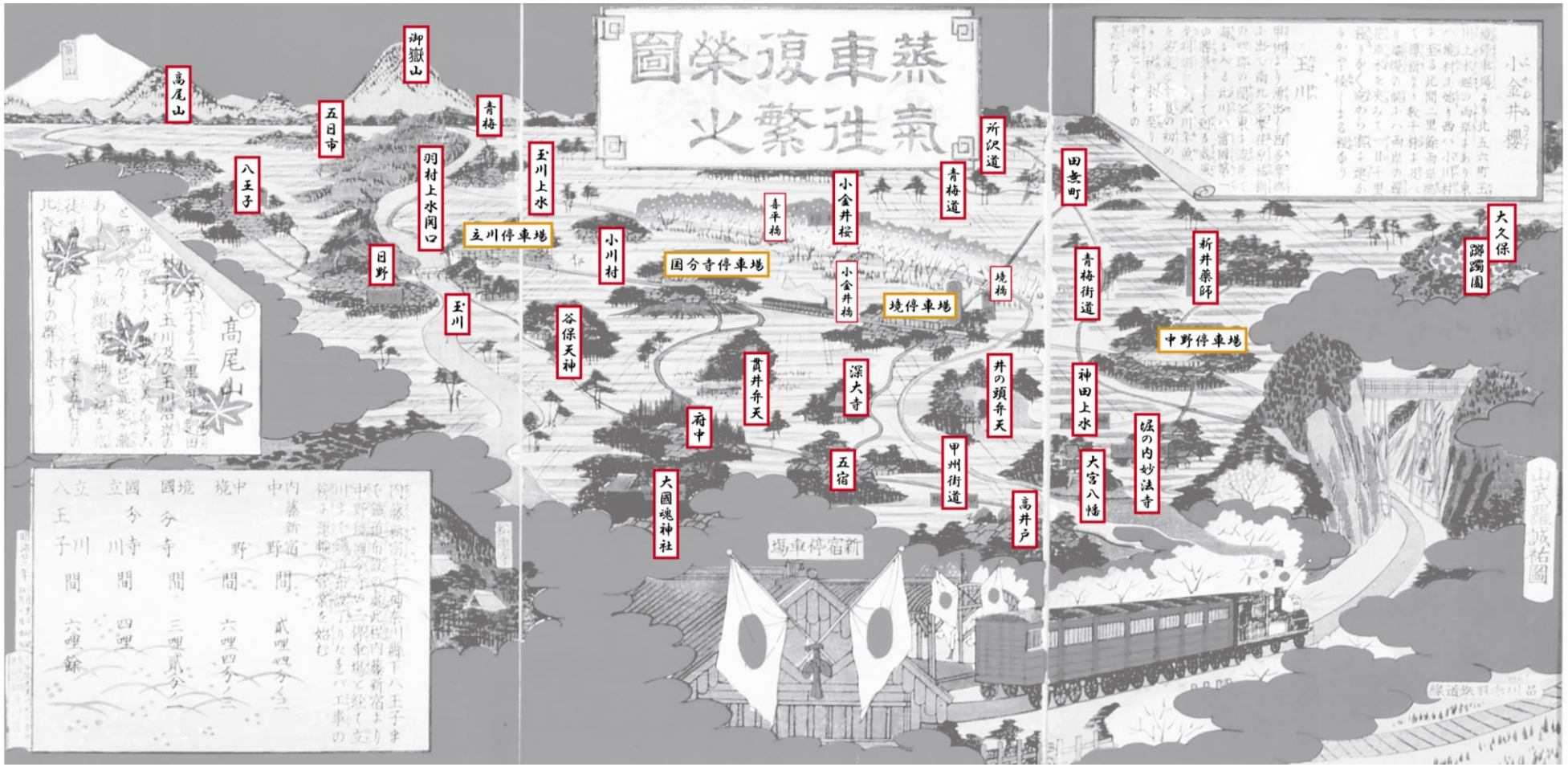
新宿を出て少し来てから立川までの間の鐵道線路が一直線であるといふことは名高い話である。柏木停車場のあたりから眺めても、いかにも真直で、殆ど見通しがつかない位である。その線路の上に、秋は白い雲などが浮んでゐる。

田山 花袋『東京の近郊』（大正五年発行）より抜粋

▲『蒸気車往復繁栄之図』

明治 22 年、甲武鉄道開業時に発行された沿線案内図。鉄道沿いの名所旧跡を紹介している。

［提供：公益財団法人たましん地域文化財団］


蒸車復榮圖
氣往繁火
御嶽山
高尾山
五日市
八王子
羽村上水関口
日野
玉川
立川停車地
青梅
玉川上水
小川村
谷保天神
国分寺停車地
青平橋
小金井桜
小金井橋
境停車地
境橋
貫井弁天
府中
大國魂神社
深大寺
五宿
井の頭弁天
甲州街道
高井戸
新宿停車場
所沢道
青梅道
田無町
青梅街道
神田上水
大宮八幡
成の内妙法寺
中野停車地
新井薬師
大久保
躑躅園
小金井桜
玉川
高尾山
内藤新宿
野間
貳哩四分
中野
六哩四分
境
國分寺
三哩貳分
國立
川間
四哩
立川
八王子
六哩餘
山武郡誠祐圖
鉄道線羽田品川

中　央　線　年　表

和暦　西暦	月日	できごと
明治19（1886）年	11月10日	新宿～八王子間の馬車鉄道免許を取得。
明治22（1889）年	4月11日	甲武鉄道の新宿～立川間が開通。 新宿、中野、境（現・武蔵境）、国分寺、立川の各駅が開業。
	8月11日	立川～八王子間が開通。八王子駅が開業。
明治23（1890）年	1月6日	日野駅開業。
明治24（1891）年	12月21日	荻窪駅開業。
明治27（1894）年	10月9日	新宿～牛込間が延伸開通。 信濃町、四ツ谷、牛込駅が開業。
明治28（1895）年	3月6日	市ケ谷駅開業。
	4月3日	牛込～飯田町間が延伸開通。飯田町駅開業。
	5月5日	大久保駅開業。
	12月30日	飯田町～新宿間が甲武鉄道初の複線化。
明治32（1899）年	12月30日	吉祥寺駅開業。
明治34（1901）年	2月22日	豊田駅開業。
明治37（1904）年	8月21日	飯田町～中野間で汽車と電車の併用運転開始。 日本で初の鉄道路線での電車運転となる。 自動信号機の使用開始。 千駄ヶ谷駅が開業。
	12月31日	飯田町～御茶ノ水間が延伸開通。御茶ノ水駅が開業。
明治39（1906）年	4月	新宿～大久保間複線化。
	6月14日	柏木（現・東中野）駅が開業。
	9月	大久保～中野間が複線化。
	9月24日	水道橋駅開業。
	10月1日	鉄道国有法に基づき甲武鉄道が買収され国有化。甲武鉄道から中央線となる。
	10月23日	代々木駅開業。
	10月24日	水道橋駅開業。
明治41（1908）年	4月19日	御茶ノ水～昌平橋間が電化で延伸開通。昌平橋駅が開業。
	12月17日	吉祥寺～国分寺間複線化。
明治42（1909）年	3月16日	中野～吉祥寺間複線化。
明治45（1912）年	1月31日	中央線電車に日本初の婦人専用車を連結。
	4月1日	昌平橋～万世橋間が延伸開通。 万世橋駅が開業。昌平橋駅が廃止。 万世橋～中野間で電車運転開始。
大正3（1914）年	12月20日	東京駅開業。

和暦　西暦	月 日	できごと
大正6（1917）年	1月1日	柏木駅が東中野駅に改称。
大正8（1919）年	2月25日	中野～吉祥寺間が電化。
	3月1日	万世橋～東京間が延伸開通（電化）。神田駅開業。
	7月1日	境駅が武蔵境駅に改称。
大正10（1921）年	7月10日	新宿電車庫を中野に移転。中野電車庫(中野電車区)開設。
大正11（1922）年	7月15日	高円寺、阿佐ケ谷、西荻窪駅開業。
	11月20日	吉祥寺～国分寺間が電化。
大正15（1926）年	1月15日	武蔵小金井駅開業。
	4月1日	国立駅開業。
昭和2（1927）年	8月27日	山手・中央・京浜線で初めて電車内広告を許可。
昭和3（1928）年	5月11日	新宿～中野間が複々線化。
	10月15日	国分寺～国立間が複線化。
	11月15日	飯田橋駅開業。牛込駅廃止。
昭和4（1929）年	3月1日	国立～立川間が複線化。
	3月5日	国分寺～国立間が電化。
	3月16日	飯田橋～新宿間が複々線化。
	6月16日	国立～立川間が電化。
昭和5（1930）年	6月25日	三鷹駅開業。
	12月20日	立川～浅川（現・高尾）間が電化。
昭和6（1931）年	12月15日	飯田町～八王子間を電気運転に変更。
昭和8（1933）年	9月15日	御茶ノ水～飯田橋間が複々線化。
	10月4日	新宿～飯田町間の貨物支線を中央線に編入。飯田町駅に貨物専用駅開業。
昭和12（1937）年	6月1日	立川～豊田間が複線化。
昭和14（1939）年	3月31日	豊田～浅川(現・高尾)間が複線化。
昭和24（1949）年	6月1日	日本国有鉄道（通称・国鉄）発足。
昭和32（1957）年	12月16日	オレンジ色の通勤型車両モハ90形(後に101系に改称)が運転を開始。（昭和60年運転終了）
昭和36（1961）年	3月20日	浅川駅が高尾駅に改称。
昭和39（1964）年	9月10日	東小金井駅が開業。
	9月22日	中野～荻窪間の高架完成。

和暦　西暦	月 日	できごと
昭和41（1966）年	3月16日	営団地下鉄（現・東京メトロ）東西線の中野駅乗り入れ開始。
	4月3日	中野～荻窪間が複々線化。
	4月28日	中央線緩行電車の荻窪延長。快速電車の休日運転を開始。
	10月1日	中央線緩行線に地下鉄乗り入れ対応車の301系運転開始（平成15年廃車）。
	12月12日	中央線初の特急電車「あずさ」号運転開始。
昭和42（1967）年	7月3日	東京～高尾間で「特別快速」の運転開始。
昭和43（1968）年	8月15日	車両塗色の規定の一部を改正。 新型通勤電車の中央線快速電車は朱色に制定。
昭和44（1969）年	4月6日	荻窪～三鷹間が複々線化。
	4月8日	総武緩行電車を三鷹まで直通運転延長。
昭和45（1970）年	10月27日	中央線緩行線用として地下鉄乗り入れ対応車の103系1200番台落成（平成15年廃車）。
昭和47（1972）年	7月15日	中央線快速電車の運転時間を東京発下り23時まで拡大。
昭和48（1973）年	3月1日	中央快速線に103系の運転開始（昭和58年運転終了）。
	4月1日	武蔵野線の府中本町～新松戸間が開通し、接続駅の西国分寺駅が開業。
	9月15日	中央線の快速と特別快速に初めてシルバーシートを設置。
昭和54（1979）年		中央・総武緩行線に103系の運転開始。
		中央快速線に201系試作車の運転開始。
昭和57（1982）年	8月14日	中央・総武緩行線に201系の運転開始。
昭和61（1986）年	11月1日	東京～高尾間で下り夜間に「通勤快速」の運転開始。
昭和62（1987）年	4月1日	国鉄が分割・民営化され、JR東日本発足。
昭和63（1988）年	12月1日	「特別快速」を「中央特快」「青梅特快」に分離。
平成元年（1989）年		中央・総武緩行線に205系の運転開始。
平成5（1993）年	4月10日	上り平日朝に「通勤特快」の運転開始。
平成7（1995）年	7月2日	東京駅中央線新高架ホーム使用開始。
平成10（1998）年	12月	中央・総武緩行線に209系の運転開始。
平成11（1999）年	3月9日	飯田町駅が廃止。
平成13（2001）年	11月18日	新しい出改札システム、ＩＣカード「Suica」のサービスを東京～大月間で開始。
	12月	中央・総武緩行線201系が青梅・五日市・京葉線に転属。 205系も同時期に他線へ転属。
平成17（2005）年	9月5日	中央線201系車両に「女性専用車」を導入。
平成18（2006）年	12月26日	中央快速線にE233系の運転開始。

和暦　　西暦	月 日	できごと
平成21（2009）年		中央線開業120周年。
平成22（2010）年	10月14日	中央快速線201系定期営業運転終了。
	11月	西国分寺～立川間が高架化。
平成25（2013）年	3月16日	デイタイムの「中央特快」を増発。 中央線の最高速度を95km/hから100km/hにアップ。

参考文献
『中央線　オレンジ色の電車今昔50年』三好好三 他/著,JTBパブリッシング,2008
『JR中央線　街と駅の1世紀』生田誠/著,彩流社,2014
「中央線の歴史」JR東日本八王子支社
（https://www.jreast.co.jp/hachioji/chuousen/history_chu/h_01.html）

中央線沿線に住んだ文士たち

新宿以西の中央線沿線に文士たちが姿を見せ始めたのは、大正 12 年頃のこと。このころはちょうど、関東大震災によって東京郊外への人口流出が盛んになり、沿線が急速に発展した時期であった。

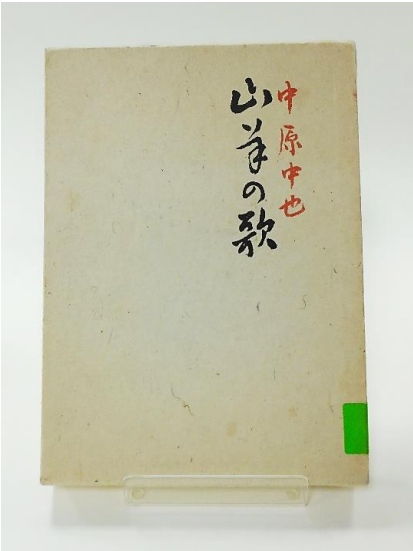
特に中野や杉並は、後に文士村と呼ばれる場所ができるほど多くの文士たちが集っていた。中野近辺には松本泰・恵子夫妻が建てた通称谷戸文士村（現・中野一丁目あたり）があり、田河水泡や小林秀雄などが住んでいた。阿佐ヶ谷近辺には、井伏鱒二を中心として太宰治や三好達治、伊藤整、北原白秋などが住んだ。文士たちは頻繁に会合を開き、お互いの家へ通い合いながら交流を深めた。中原中也もそんな文士たちの一人であった。

中也と文士たちの交流

高村（たかむら） 光太郎（こうたろう）

明治 16(1883)年 3 月 13 日～昭和 31 年(1956)年 4 月 2 日

彫刻家・詩人。東京府下谷区西町(現・東京都台東区)出身。東京美術学校（現・東京芸術大学）卒業。明治 39 年海外へ留学。昭和 16 年に病死した妻、智恵子にまつわる詩集『智恵子抄』を発表。27 年青森県から十和田湖畔に建てる彫像を委嘱され、中野のアトリエでブロンズ像「乙女の像」を制作した。73 歳で死去。著書に『道程』、彫刻に「手」など。



▲『山羊の歌』復刻版，日本近代文学館
［中野区立中央図書館所蔵］

高村が手掛けた『宮沢賢治全集』の装丁を中也が気に入り、自身の初めての詩集である『山羊の歌』の装丁を高村に依頼した。中也は「高村さんのような字が好きなんだ、あれはいい字だよ」としきりに強調した。高村も「何だか約束事のやうな感じがして安心して引きうけた」と快く引き受け、装丁代はもらわなかったという。

太宰（だざい） 治（おさむ）

明治 42(1909)年 6 月 19 日～昭和 23(1948)年 6 月 13 日

作家。青森県北津軽郡金木村(現・五所川原市)出身。東京帝国大学仏文科中退。井伏鱒二に師事し、無頼派として人気の小説家。『人間失格』『走れメロス』『斜陽』などの有名作品を残すが、幾度もの自殺未遂を繰り返した末に玉川上水で入水自殺。38 歳で死去。

同人誌『青い花』の創刊メンバーだった太宰は檀一雄、草野心平、中也らと文学について語ることもあった。その折、酒に酔った中也と乱闘になったことがあるようで、檀曰く「太宰は、中原をひどく嫌悪しながら、しかし、近づかねばならない、という、忍従の祈願のようなものを感じていた」と書いている。

凄絶な絡まれ方をしてもそこで二人の交流が絶えたわけではなく、高橋新吉が中也の住む花園アパートの玄関先に腰かける太宰を目撃している。しかし会うのを嫌がる時もあったようで、「中原とつきあうのは、井伏さんに止められているんでね」と言って避けるそぶりも見せていた。

坂口（さかぐち） 安吾（あんご）

明治 39(1906)年 10 月 20 日～昭和 30(1955)年 2 月 17 日

小説家。新潟県新潟市西大畑通（現・新潟市中央区西大畑町）出身。荏原尋常小学校分教場で代用教員を務めた後、大正 15 年東洋大学に入学。昭和 5 年卒業。無頼派作家、新戯作派と呼ばれ、歴史小説、推理小説の他に文明批評的エッセイなど幅広く執筆。48 歳で死去。著書に『堕落論』『白痴』『桜の森の満開の下』など。

中也と坂口が酒場で出会った話は、坂口がエッセイ「酒のあとさき」などで紹介している。ある娘をめぐって、中也は坂口に突然殴りかかったが届いておらず、一人でストレート、アッパーカット、と息を切らして影に向かって乱闘していた。それを見た坂口が笑い「一緒に飲まないか」と声をかけると、「キサマはエレイ奴だ」と隣に座り、一緒に酒を飲んだという。女性の事は口実で、中也は私と友達になりたがっていたのだ、と坂口は振り返る。

中原中也　年表

年代		年齢	出来事
明治	40年 (1907)	0歳	4月 29日、陸軍軍医の父謙助、母フクの長男として、山口県吉敷郡山口町大字下宇野令村（現山口市湯田温泉)に誕生。 11月以降、父の任地である中国の旅順・柳樹屯で暮らす。
	42年 (1909)	2歳	3月 父の転勤で広島に転居。
	44年 (1911)	4歳	4月 広島女学校附属幼稚園（現広島女学院ゲーンス幼稚園）に入園。明敏で周囲の人々に愛される。
	45年 (1912) 大正元年	5歳	9月 父の転勤で金沢に転居。
大正	3年 (1914)	7歳	3月 父が朝鮮京城に転勤となり、学齢に達していたため祖母と共に山口に帰る。母弟も遅れて帰京。 4月 下宇野令尋常高等小学校（現湯田小学校）尋常科に入学。4年まで在籍し、「神童」と呼ばれる。
	4年 (1915)	8歳	1月 弟亜郎病没。亡弟亜郎を歌ったのが詩作の始まり。 8月 父が転勤で山口に帰郷。温泉地湯田の環境を父が嫌っていた為、中也は外へ遊びに出られず、水泳も禁止されていた。
	7年 (1918)	11歳	5月 山口師範学校附属小学校(現山口大学教育学部附属山口小学校）に転校。小柄で明敏、戦闘的でありながらひょうきんで、クラスの人気者。成績は唱歌と体操以外は甲。
	9年 (1920)	13歳	2月 『婦人画報』に短歌「筆とりて」入選。『防長新聞』17日号に「冬されよ」など三首入選。以降投稿を続ける。 4月 県立山口中学校に入学。入学後は学業を怠るようになる。読書欲が起こり、小説家を志す。
	11年 (1922)	15歳	4月 山口中学校の上級生宇佐川紅萩、『防長新聞』の若手記者吉田緒佐夢と共著で私家版の歌集『末黒野』を刊行。 6月 山口中学校弁論会に出場。論題は「将来の芸術」。
	12年 (1923)	16歳	3月 山口中学校を成績不良で落第。 4月 京都の立命館中学に転校。秋、高橋新吉の『ダダイスト新吉の詩』を読み、ダダイズムの詩を書き始める。 12月 表現座の３歳年上の女優、長谷川泰子と出会う。
	13年 (1924)	17歳	4月 長谷川泰子と同棲。 7月 京都に来た富永太郎を知り、以後親交を深める。富永よりフランス象徴詩を学ぶ。 秋、「詩の宣言」を書く。
	14年 (1925)	18歳	3月 泰子と共に上京。この頃、早稲田大学予科、日本大学予科の受験を考えていたが、遅刻等の理由で受験できず。富永の紹介状を持って、小林秀雄に会いに行く。 4月 東京府豊多摩郡中野町大字中野小字打越1985、永島方に移転。 11月 富永、結核により没す。泰子、小林の許に去る。 東京府豊多摩郡中野町大字中野小字桃園3398、関根増五郎方に移転。 この年の暮れか翌年の初め、宮沢賢治『春と修羅』を購入し、愛読。

年代		年齢	出来事
	15年 (1926) 昭和元年	19 歳	4月 日本大学予科文科に入学。 5月 「朝の歌」を書き、7月頃、小林に見せる。 東京府豊多摩郡中野町大字中野小字桃園3465、篠田方に移転。 8月 「朝の歌」定稿成立。 9月 家族に無断で日本大学を退学。 10月 東京府豊多摩郡中野町大字中野小字上町に移転。 11月 この頃、語学学校「アテネ・フランセ」に通う。 東京府豊多摩郡中野町大字中野小字桃園3398、関根増五郎方に移転。
昭和	2年 (1927)	20 歳	春、河上徹太郎を知る。「地極の天使」を送る。 10月 高橋新吉を訪問。 11月 河上の紹介で諸井三郎を知り、後に『山羊の歌』に収録する初期詩篇の詩稿を見せて作曲を依頼。 諸井を通じて音楽集団「スルヤ」との交流始まる。
	3年 (1928)	21 歳	3月 小林の紹介で大岡昇平を知る。諸井の紹介で関口隆克を知る。 5月 音楽団体スルヤ発表演奏会で「朝の歌」「臨終」（諸井三郎作曲）が歌われ、歌詞として機関誌『スルヤ』に掲載される。 16日 父謙助没。母や家族たちの意向で帰省せず。 同月、小林が泰子の許を去る。 7月 安原喜弘を知る。
	4年 (1929)	22 歳	4月 同人誌『白痴群』創刊。 以後、翌年廃刊になるまで、詩篇・翻訳・評論を発表。
	5年 (1930)	23 歳	4月 『白痴群』が第6号で廃刊となり主要発表誌を失う。 5月 「スルヤ」第5回発表演奏会で「帰郷」「失せし希望」（内海誓一郎作曲）「老ひたるものをして…空しき秋　第１２」（諸井三郎作曲）が歌われる。 9月 中央大学予科に入学。 秋、吉田秀和を知る。 12月 泰子が築地小劇場の演出家・山川幸世の子茂樹を出産、名付け親となる。
	6年 (1931)	24 歳	4月 東京外国語学校専修科仏語に入学。 5月 青山二郎、竹田鎌二郎を知る。 9月 弟恰三病没。のちに追悼詩「疲れやつれた美しい顔」「死別の翌日」および小説「亡弟」を書く。 冬、高森文夫を知る。
	7年 (1932)	25 歳	4月 詩集『山羊の歌』の編集に着手。 6月 『山羊の歌』の編集を終え、一口2円の予約募集通知を２回出すが、申込は十数名程度にとどまる。 この頃、自宅でフランス語の個人教授を行う。 9月 母からもらった300円で『山羊の歌』の印刷にかかるが、資金不足で刊行に至らず。 この年、坂口安吾を知る。
	8年 (1933)	26 歳	3月 東京外国語学校専修科仏語修了。 5月 同人誌『紀元』に加わる。牧野信一を知る。 12月 遠縁にあたる上野孝子と結婚。訳詩集『ランボオ詩集（学校時代の詩）』を三笠書房より刊行。 青山二郎と同じアパートに新居を構える。
	9年 (1934)	27 歳	4月 『紀元』を脱退。 9月 建設社の依頼でランボーの韻文詩の翻訳を始める。 10月 長男文也誕生。 11月 草野心平ら『歴程』同人の催した朗読会で「サーカス」を朗読。 この頃、檀一雄の紹介で太宰治を知る。 12月 『山羊の歌』を文圃堂書店より刊行。

年代		年齢	出来事
	10年 (1935)	28 歳	1月 小林秀雄が『文学界』の責任編集者となり、以後、同誌に詩や評論を相次いで発表。 5月 『歴程』の同人となる。 11月 立原道造を知る。 12月 『四季』の同人となる。
	11年 (1936)	29 歳	6月 訳詩集『ランボオ詩抄』を山本書店より刊行。 秋頃、NHKの入社面接を受けるが、就職せず。 11月 文也病没。 12月 次男愛雅誕生。 文也の死の衝撃で、神経衰弱が昂じる。
	12年 (1937)	30 歳	1月 千葉市の中村古峡療養所（現中村古峡記念病院）に入院。 2月 退院。鎌倉に転居。 夏、帰郷を決意、友人らに告げる。 9月 訳詩集『ランボオ詩集』を野田書房より刊行。詩集『在りし日の歌』を編集、清書して、小林秀雄に託す。 10月 結核性脳膜炎を発病、鎌倉養生院（現清川病院）入院。 22日、死去。 24日、寿福寺で告別式。戒名は放光院賢空文心居士。 31日、山口・湯田で葬式。吉敷の「中原家累代之墓」に葬られる。
	13年 (1938)		1月 愛雅病没。 4月 『在りし日の歌』が創元社より刊行。初版600部。 6月 300部増刷。

参考文献:『中原中也の世界 中原中也記念館公式ガイドブック』中原中也記念館, 2014

展示風景

◀ 展示スペース

▶ 正面入口展示スペース

▲ ポスター

◀ 正面入りロガラスケース

▶ 平置きガラスケース

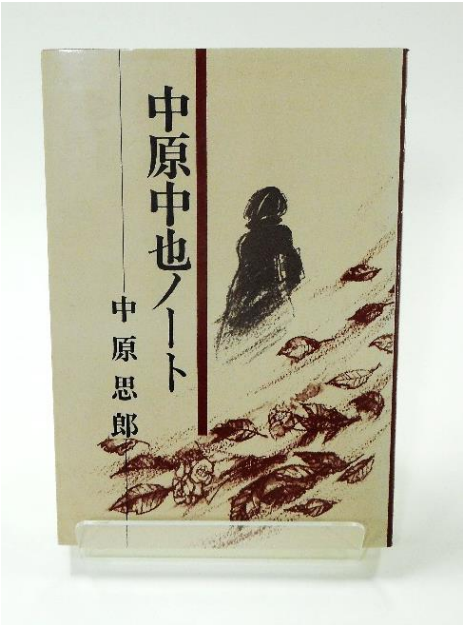
展示物

［中野区立中央図書館所蔵資料］

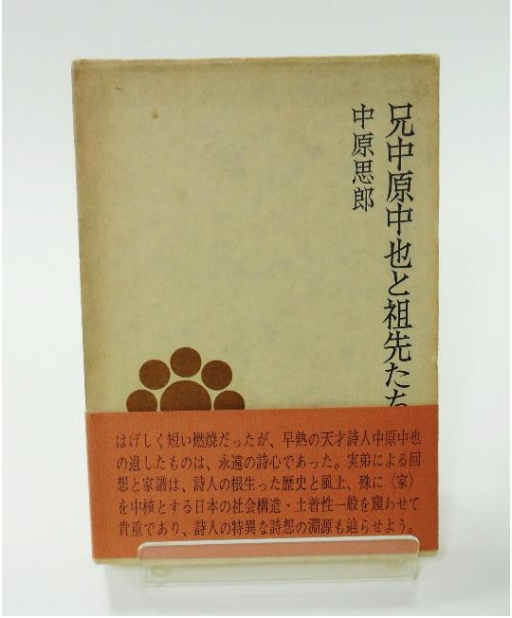
◀ 『白痴群』復刻版, 日本近代文学館

▶ 『鷭』復刻版, 日本近代文学館

◀『歌集 末黒野』復刻版 ，中原中也記念館
大正 11 年、吉田緒佐夢と共著で出した私家版の詩集



▲『中原中也ノート』中原思郎/著, 審美社



▲『兄中原中也と祖先たち』中原思郎/著, 審美社

▲『海の旅路』中原呉郎/著, 昭和出版

第15回中野区ゆかりの著作者紹介展示
「中也と中野と中央線」 ブックリスト　中原中也

中原　中也

展示	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号		禁帯
	中原中也全集　１　詩1	中原　中也／著	角川書店	1967	911.56	ナカ	
	中原中也全集　２　詩2	中原　中也／著	角川書店	1967	911.56	ナカ	
	中原中也全集　３　評論　小説	中原　中也／著	角川書店	1967	911.56	ナカ	
	中原中也全集　４　日記　書簡	中原　中也／著	角川書店	1968	911.56	ナカ	
	中原中也全集　５　翻訳	中原　中也／著	角川書店	1968	911.56	ナカ	
	中原中也全集　別巻	中原　中也／著	角川書店	1971	911.56	ナカ	
	中原中也詩集　（現代詩文庫）	中原　中也／著	思潮社	1975	911.56	ナ	
★	名著復刻詩歌文学館　山茶花セット　23　山羊の歌	中原　中也／著	日本近代文学館	1980	911	Me22B	
★	精選名著復刻近代文学館　31　在りし日の歌	中原　中也／著	日本近代文学館	1983	918.6	セ	
	新編中原中也全集　第1巻[1]　詩1　本文篇	中原　中也／著	角川書店	2000	918.69	ナカ	
	新編中原中也全集　第1巻[2]　詩1　解題篇	中原　中也／著	角川書店	2000	918.69	ナカ	
	新編中原中也全集　第2巻[1]　詩2　本文篇	中原　中也／著	角川書店	2001	918.69	ナカ	
	新編中原中也全集　第2巻[2]　詩2　解題篇	中原　中也／著	角川書店	2001	918.69	ナカ	
	新編中原中也全集　第3巻[1]　翻訳　本文篇	中原　中也／著	角川書店	2000	918.69	ナカ	
	新編中原中也全集　第3巻[2]　翻訳　解題篇	中原　中也／著	角川書店	2000	918.69	ナカ	
	新編中原中也全集　第4巻[1]　評論・小説　本文篇	中原　中也／著	角川書店	2003	918.69	ナカ	
	新編中原中也全集　第4巻[2]　評論・小説　解題篇	中原　中也／著	角川書店	2003	918.69	ナカ	
	新編中原中也全集　第5巻[1]　日記・書簡　本文篇	中原　中也／著	角川書店	2003	918.69	ナカ	
	新編中原中也全集　第5巻[2]　日記・書簡　解題篇	中原　中也／著	角川書店	2003	918.69	ナカ	
	新編中原中也全集　別巻　上　写真・図版篇	中原　中也／著	角川書店	2004	918.69	ナカ	
	新編中原中也全集　別巻　下　資料・研究篇	中原　中也／著	角川書店	2004	918.69	ナカ	
★	むかしの汽車旅　（河出文庫）	出久根　達郎／編	河出書房新社	2012	915.6	ムカ	
	日本文学全集　29　近現代詩歌	池澤　夏樹／個人編集	河出書房新社	2016	918	ニ	
★	歌集　末黒野　（復刻版）		中原中也記念館	2000	918.6	ナ	◎
★	白痴群　（復刻版）		日本近代文学館	1974	918.6	ナ	◎
★	鷭　（復刻版）		日本近代文学館	1976	V87	A	◎
★	中原中也の詩による四つの女声合唱曲	中原　中也／作詞 溝上　日出男／作曲	全音楽譜出版社	1998	911.58	ナ	◎
★	私の上に降る雪は　わが子中原中也を語る　（講談社文芸文庫）	中原　フク／著	講談社	1998	911.52	ナ	
★	兄中原中也と祖先たち	中原　思郎／著	審美社	1974	911.52	ナ	◎
★	中原中也ノート	中原　思郎／著	審美社	1978	911.52	ナ	◎
★	海の旅路　中也・山頭火のこと他	中原　呉郎／著	昭和出版	1976	911.52	ナ	◎
★	中原中也詩研究	太田　静一／著	審美社	1966	911.5	オ	
★	中原中也研究	大岡　昇平[ほか]／編	青土社	1975	911.52	ナ	
★	中原中也の詩と生涯	村上　護／著	講談社	1979	911.52	ナ	
★	新潮日本文学アルバム　30　中原中也		新潮社	1985	910.26	シ	
★	中原中也　（群像日本の作家）	中沢　けい[ほか]／著	小学館	1991	911.52	ナ	
	中原中也　（新文芸読本）		河出書房新社	1991	911.52	ナ	

★	知れざる炎　評伝中原中也　（講談社文芸文庫）	秋山　駿／著	講談社	1991	911.52	ナ	
	中原中也　魂とリズム　（日本文学研究資料新集）	長野　隆／編	有精堂出版	1992	R911.52	ナ	◎
★	作家の自伝　54　中原中也　（シリーズ・人間図書館）	佐伯　彰一［ほか］／監修	日本図書センター	1997	911.52	ナ	
★	中也ノオト　私と中原中也	野々上　慶一／著	かまくら春秋社	2003	911.52	ナ	
★	中原中也－永訣の秋	青木　健／著	河出書房新社	2004	911.52	ナ	
★	宮沢賢治と中原中也　中原中也記念館特別企画展	中原中也記念館／編集	中原中也記念館	2004	911.52	ナ	◎
★	中原中也悲しみからはじまる　（理想の教室）	佐々木　幹郎／著	みすず書房	2005	911.52	ナ	
	中原中也帝都慕情	福島　泰樹／著	日本放送出版協会	2007	911.52	ナ	
★	中原中也　魂の詩人　（別冊太陽　日本のこころ）	佐々木　幹郎／監修	平凡社	2007	911.52	ナ	
	中原中也再見　もう一つの銀河　（角川学芸ブックス）	青木　健／著	角川学芸出版	2007	911.52	ナ	
★	中原中也論集成	北川　透／著	思潮社	2007	911.52	ナ	
★	中原中也の世界　中原中也記念館公式ガイドブック	中原中也記念館／編集	中原中也記念館	2014	911.52	ナ	◎
	中原中也　（年表作家読本）	青木　健／編著	河出書房新社	2017	911.52	ナ	
	近代文学雑誌事典	長谷川　泉／編	至文堂	1966	910.05	ハ	
	日本近代文学大事典　第5巻　新聞・雑誌	日本近代文学館／編	講談社	1977	910.26	ニ	
★	さまざまな追想　文士というさむらいたち	野々上　慶一／著	文芸春秋	1985	910.26	ノ	
★	文士の筆跡　3　新装版　詩人篇	伊藤　整［ほか］／編集	二玄社	1986	728	ブ	
★	文士たちの宿　作家と名作のもうひとつの物語　（私の創る旅）	マガジントップ／編	山海堂	1999	291.09	ブ	
	文豪おもしろ豆事典	塩澤　実信／著	北辰堂出版	2009	910.26	シ	
★	日本人の帽子	樋口　覚／著	講談社	2000	910.26	ヒ	
★	鉄道の文学紀行　茂吉の夜汽車、中也の停車場　（中公新書）	佐藤　喜一／著	中央公論新社	2006	910.26	サ	
★	中野を語る建物たち　中野区大正期・昭和前期建造物調査報告書	伝統技法研究会／制作	中野区教育委員会事務局生涯学習分野	2011	Q25	A	
	日本服飾史　男性編　風俗博物館所蔵	井筒　雅風／著	光村推古書院	2015	383.1	イ	
	日本人のすがたと暮らし　明治・大正・昭和前期の身装	大丸　弘／著 高橋　晴子／著	三元社	2016	383.1	ダ	
	近代日本学校制服図録	難波　知子／著	創元社	2016	383.1	ナ	
	文豪図鑑　あの文豪の素顔がわかる	開発社／編	自由国民社	2016	910.2	ブ	
	文豪図鑑完全版　あの文豪の素顔がすべてわかる	開発社／編	自由国民社	2017	910.26	ブ	
★	文豪と暮らし　彼らが愛した物・食・場所	開発社／編	創藝社	2017	910.26	ブ	
★	もし文豪たちが現代の文房具を試しに使ってみたら	福島　槇子／著 寺井　広樹／著	ごま書房新社	2018	589.7	フ	
★	文豪ナンバーワン決定戦	福田　和也／監修	宝島社	2018	910.26	ブ	

青山　二郎

展示	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号		禁帯
★	いまなぜ青山二郎なのか	白洲　正子／著	新潮社	1991	289.1	ア	
★	鎌倉文士骨董奇譚　（講談社文芸文庫　現代日本のエッセイ）	青山　二郎／著	講談社	1992	914.6	アオ	
★	眼の哲学・利休伝ノート　（講談社文芸文庫　現代日本のエッセイ）	青山　二郎／著	講談社	1994	914.6	アオ	
★	青山二郎の眼　（別冊太陽　日本のこころ）		平凡社	1994	289.1	ア	
★	青山二郎文集　増補版	青山　二郎／著	小沢書店	1995	914.6	アオ	
★	日本の名随筆　別巻56　賭事	安部　譲二／編	作品社	1995	914.68	ニ	

★	青山二郎の素顔　陶に遊び美を極める	森　孝一／編	里文出版	1997	289.1	ア	
★	遊鬼　わが師わが友　（新潮文庫）	白洲　正子／著	新潮社	1998	914.6	シラ	
★	日本の名随筆　別巻87　装丁	松山　猛／編	作品社	1998	914.68	ニ	
★	青山二郎の話　改版　（中公文庫）	宇野　千代／著	中央公論新社	2004	913.6	ウノ	
★	眼の引越　改版　（中公文庫）	青山　二郎／著	中央公論社	2006	914.6	アオ	

坂口　安吾

展示	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号		禁帯
★	安吾「日本史談」　（Kosaido blue books）	坂口　安吾／著	広済堂出版	1973	913.6	サカ	
★	真書太閤記	坂口　安吾／著 檀　一雄／著	六興出版	1982	913.6	サカ	
★	太宰と安吾	檀　一雄／著	沖積舎	1989	910.268	ダザ	
★	吹雪物語　（講談社文芸文庫）	坂口　安吾／著	講談社	1989	913.6	サカ	
★	堕落論　（近代文芸評論叢書）	坂口　安吾／著	日本図書センター	1990	914.6	サカ	
★	青春論・恋愛論　（こころBOOKS）	坂口　安吾／著	青竜社	1992	914.6	サカ	
★	日本幻想文学集成　31　坂口安吾	坂口　安吾／著 富士川　義之／編	国書刊行会	1995	918.6	ニ	
★	坂口安吾全集　05	坂口　安吾／著	筑摩書房	1998	918.68	サカ	
★	坂口安吾　1906－1955　（ちくま日本文学）	坂口　安吾／著	筑摩書房	2008	913.6	サカ	
★	堕落論・日本文化私観　他二十二篇　（岩波文庫）	坂口　安吾／著	岩波書店	2008	914.6	サカ	
★	風と光と二十の私と・いずこへ　他十六篇　（岩波文庫）	坂口　安吾／著	岩波書店	2008	913.6	サカ	

大岡　昇平

展示	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号		禁帯
★	大岡昇平全集　第10巻　評伝	大岡　昇平／著	中央公論社	1974	918.68	オオ	
★	大岡昇平全集　第14巻　評論	大岡　昇平／著	中央公論社	1974	918.68	オオ	
★	中原中也	大岡　昇平／著	角川書店	1975	911.52	ナ	
★	桜と銀杏　（現代日本のエッセイ）	大岡　昇平／著	毎日新聞社	1976	914.6	オオ	
★	眼と文学　（現代の随想）	大岡　昇平／著	日本書籍	1978	914.6	オオ	
★	花影　（新潮文庫）	大岡　昇平／著	新潮社	1979	913.6	オオ	
★	事件　（新潮文庫）	大岡　昇平／著	新潮社	1980	913.6	オオ	
★	わが文学生活　（中公文庫）	大岡　昇平／著	中央公論社	1981	910.268	オオ	
★	小説家夏目漱石	大岡　昇平／著	筑摩書房	1988	910.26	ナ	
★	野火　（日本の文学）	大岡　昇平／著	金の星社	1989	913.6	オ	
★	昭和末	大岡　昇平／著	岩波書店	1989	914.6	オオ	
★	大岡昇平　（群像日本の作家）	金井　美恵子［ほか］／著	小学館	1992	910.268	オオ	
★	大岡昇平全集　18　評論Ⅴ	大岡　昇平／著	筑摩書房	1995	918.68	オオ	
★	作家の自伝　59　大岡昇平　（シリーズ・人間図書館）	佐伯　彰一［ほか］／監修	日本図書センター	1997	910.268	オオ	
★	大岡昇平と中原中也　中原中也記念館特別企画展	中原中也記念館／編集	中原中也記念館	2018	911.52	ナ	◎

河上　徹太郎

展示	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号		禁帯
★	文学的回想録	河上　徹太郎／著	朝日新聞社	1965	914.6	カワ	
★	わが象徴派的人生　（人と思想）	河上　徹太郎／著	文芸春秋	1972	914.6	カワ	
★	わが中原中也	河上　徹太郎／著	昭和出版	1975	910.268	ナカ	
★	愁ひ顔のさむらひたち	河上　徹太郎／著	文芸春秋	1975	914.6	カワ	
★	西欧暮色　文学手帖　（河出文芸選書）	河上　徹太郎／著	河出書房新社	1977	914.6	カワ	
★	日本のアウトサイダー　（中公文庫）	河上　徹太郎／著	中央公論社	1987	281.0	カ	
★	都築ケ岡から　（講談社文芸文庫　現代日本のエッセイ）	河上　徹太郎／著	講談社	1990	914.6	カワ	
★	戦後の虚実　（近代文芸評論叢書）	河上　徹太郎／著	日本図書センター	1990	904	カ	
★	ドン・ジョヴァンニ　（講談社学術文庫）	河上　徹太郎／著	講談社	1991	762.3	モ	
★	日本の名随筆　別巻57　喧嘩	嵐山　光三郎／編	作品社	1995	914.68	ニ	
★	吉田松陰　武と儒による人間像　（講談社文芸文庫）	河上　徹太郎／著	講談社	2009	289.1	ヨ	
★	河上徹太郎と中原中也―その詩と真実　中原中也記念館特別企画展	中原中也記念館／編集	中原中也記念館	2010	911.52	ナ	◎

草野　心平

展示	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号		禁帯
★	現代詩鑑賞講座　８　歴程派の人びと	伊藤　信吉［ほか］／編	角川書店	1969	911.5	ゲ	
★	私の中の流星群　死者への言葉　［正］	草野　心平／著	新潮社	1975	911.52	ク	
★	私の中の流星群　続	草野　心平／著	新潮社	1977	911.52	ク	
★	草野心平詩集	草野　心平／著	思潮社	1981	911.56	ク	
★	玄玄　詩集	草野　心平／著	筑摩書房	1981	911.56	ク	
★	未来　詩集	草野　心平／著	筑摩書房	1983	911.56	ク	
★	わが光太郎　（講談社文芸文庫　現代日本のエッセイ）	草野　心平／著	講談社	1990	911.52	タ	
★	宮沢賢治覚書　（講談社文芸文庫　現代日本のエッセイ）	草野　心平／著	講談社	1991	910.268	ミヤ	
★	作家の自伝　16　草野心平　（シリーズ・人間図書館）	佐伯　彰一［ほか］／監修	日本図書センター	1994	910.268	クサ	
★	草野心平　わが青春の記　（人間の記録）	草野　心平／著	日本図書センター	2004	911.52	ク	

小林　秀雄

展示	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号		禁帯
★	小林秀雄全集　第2巻　新訂　ランボオ　Xへの手紙	小林　秀雄／著	新潮社	1978	918.68	コバ	
★	旧友交歓　小林秀雄対談集	小林　秀雄／著	求竜堂	1980	914.6	コバ	
★	白鳥・宣長・言葉	小林　秀雄／著	文芸春秋	1983	914.6	コバ	
★	信ずることと知ること	小林　秀雄／著	弥生書房	1991	914.6	コバ	
★	日本の名随筆　別巻13　名曲	遠山　一行／編	作品社	1992	914.68	ニ	
★	ある回想　小林秀雄と河上徹太郎	野々上　慶一／著	新潮社	1994	910.26	ノ	
★	Xへの手紙・私小説論　改版（新潮文庫）	小林　秀雄／著	新潮社	2004	914.6	コバ	
★	モオツァルト・無常という事　改版（新潮文庫）	小林　秀雄／著	新潮社	2006	914.6	コバ	
★	小林秀雄と中原中也　中原中也記念館特別企画展	中原中也記念館／編集	中原中也記念館	2007	911.52	ナ	◎
★	高級な友情　小林秀雄と青山二郎　（講談社文芸文庫）	野々上　慶一／著	講談社	2008	910.268	コバ	
★	兄小林秀雄との対話　人生について　（講談社文芸文庫）	高見沢　潤子／著	講談社	2011	910.268	コバ	

★	小林秀雄と中原中也　（講談社文芸文庫）	秋山　駿／著	講談社	2018	910.268	コバ	

関口　隆克

展示	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号		禁帯
★	人は学ぶことができるか　教師と弟子	喜多村　和之／著	玉川大学出版部	1995	370.4	キ	
★	幸田文対話	幸田　文［ほか］／著	岩波書店	1997	914.6	コウ	
	関口隆克が語り歌う中原中也　※視聴覚資料	関口　隆克／講演	開成学園	2010	S02	1035	

高橋　新吉

展示	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号		禁帯
★	無門関	山田　無文／著 高橋　新吉／著	法蔵館	1958	188.8	ヤ	
★	道元禅師の生涯	高橋　新吉／著	宝文館出版	1963	188.8	タ	
★	禅と文学	高橋　新吉／著	宝文館出版	1970	188.8	タ	
★	高橋新吉詩集　（世界の詩）	高橋　新吉／著 清水　康雄／編	弥生書房	1972	908	セ	
★	高橋新吉の禅の詩とエッセー	高橋　新吉／著	講談社	1973	911.56	タ	
★	日本の詩　18　安西冬衛　高橋新吉　北川冬彦集	高橋　新吉［ほか］／著	集英社	1979	911.56	ニ	
★	日本の詩歌　20　新訂版　中野重治　小野十三郎　高橋新吉　山之口貘		中央公論社	1979	911.0	ニ	
★	禅に参ず	高橋　新吉／著	立風書房	1980	914.6	タカ	
★	高橋新吉全集　4　自伝・エッセイ	高橋　新吉／著	青土社	1982	918.68	タカ	
★	海原　詩集	高橋　新吉／著	青土社	1984	911.56	タ	◎
★	高橋新吉研究	平居　謙／著	思潮社	1993	911.52	タ	
★	高橋新吉五億年の旅	金田　弘／著	春秋社	1998	911.52	タ	◎
★	ダダイスト新吉の詩	高橋　新吉／著	日本図書センター	2003	911.56	タ	◎
★	ダダイストの睡眠　（境界の文学）	高橋　新吉／著 松田　正貴／編	共和国	2017	913.6	タカ	

高村　光太郎

展示	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号		禁帯
★	光太郎智恵子	高村　光太郎／著 高村　智恵子／著	龍星閣	1964	915.6	タカ	
★	美について　（筑摩叢書）	高村　光太郎／著	筑摩書房	1967	704	タ	
★	現代日本文學大系　27　高村光太郎　宮澤賢治集		筑摩書房	1969	918.6	ゲ	
★	智恵子抄	高村　光太郎／著	竜星閣	1978	911.5	タ	
★	高村光太郎詩集　（現代詩文庫）	高村　光太郎／著	思潮社	1980	911.56	タ	
★	緑色の太陽　芸術論集　（岩波文庫）	高村　光太郎／著	岩波書店	1982	914.6	タカ	
★	歌曲集　智恵子抄	田中　雅明／作曲 高村　光太郎／作詞	音楽之友社	1991	767.0	タ	
★	高村光太郎　智恵子と遊ぶ夢幻の生　（ミネルヴァ日本評伝選）	湯原　かの子／著	ミネルヴァ書房	2003	911.52	タ	

★	詩稿「暗愚小伝」	高村　光太郎／著 北川　太一／編	二玄社	2006	911.56	シ	
★	ロダンの言葉　（講談社文芸文庫　現代日本の翻訳）	ロダン／述 高村　光太郎／訳	講談社	2007	704	ロ	
★	道程　高村光太郎詩集　（豊かなことば現代の日本の詩）	高村　光太郎／著 伊藤　英治／編	岩崎書店	2009	911.56	タ	

高森　文夫

展示	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号		禁帯
★	中原中也　わが青春の漂泊　（泰流選書）	野田　真吉／著	泰流社	1988	911.52	ナ	
★	誰も語らなかった中原中也　（PHP新書）	福島　泰樹／著	PHP研究所	2007	911.52	ナ	

太宰　治

展示	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号		禁帯
★	小説太宰治	檀　一雄／著	審美社	1976	913.6	ダン	
	太宰治小説選	太宰　治／著	岩波書店	1988	913.6	ダザ	
★	新ハムレット　改版　（新潮文庫）	太宰　治／著	新潮社	1995	913.6	ダザ	
★	父の言いぶん　（ランティエ叢書）	太宰　治／著	角川春樹事務所	1998	914.6	ダザ	
★	もの思う葦　改版　（新潮文庫）	太宰　治／著	新潮社	2002	914.6	ダザ	
★	二十世紀旗手　改版　（新潮文庫）	太宰　治／著	新潮社	2003	913.6	ダザ	
★	太宰治滑稽小説集　（大人の本棚）	太宰　治／著	みすず書房	2003	913.6	ダザ	
★	晩年　改版　（新潮文庫）	太宰　治／著	新潮社	2005	913.6	ダザ	
★	人間失格　改版　（新潮文庫）	太宰　治／著	新潮社	2006	913.6	ダザ	
★	新樹の言葉　改版　（新潮文庫）	太宰　治／著	新潮社	2008	913.6	ダザ	
	ヴィヨンの妻　改版　（新潮文庫）	太宰　治／著	新潮社	2009	913.6	ダザ	
★	明るい方へ　父・太宰治と母・太田静子	太田　治子／著	朝日新聞出版	2009	910.268	ダザ	
★	太宰治の年譜	山内　祥史／著	大修館書店	2012	910.268	ダザ	
	太宰治の手紙　返事は必ず必ず要りません　（河出文庫）	太宰　治／著	河出書房新社	2018	915.6	ダザ	
★	津軽　改版　（角川文庫）	太宰　治／著	KADOKAWA	2018	913.6	ダザ	
	太宰よ！45人の追悼文集　さよならの言葉にかえて　（河出文庫）	河出書房新社編集部／編	河出書房新社	2018	910.268	ダザ	

富永　太郎

展示	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号		禁帯
★	現代文学大系　67　現代詩集		筑摩書房	1967	918.6	ゲ	
★	現代日本文學大系　93　現代詩集		筑摩書房	1973	918.6	ゲ	
★	富永太郎詩集　（現代詩文庫）	富永　太郎／著	思潮社	1975	911.56	ト	
★	全集・現代文学の発見　第13巻　言語空間の探検		学芸書林	1976	918.6	ゼ	
★	日本の詩歌　26　新訂版　近代詩集		中央公論社	1979	911	ニ	
★	三人の跫音（あしおと）　大岡昇平・富永太郎・中原中也　（五柳叢書）	樋口　覚／著	五柳書院	1994	910.26	ヒ	
★	大岡昇平全集　17	大岡　昇平／著	筑摩書房	1995	918.68	オオ	

★	詩人たちの絵　（平凡社ライブラリー　offシリーズ）	窪島　誠一郎／著	平凡社	2006	911.52	ク	
★	言葉の錬金術　ヴィヨン、ランボー、ネルヴァルと近代日本文学	水野　尚／著	笠間書院	2012	910.26	ミ	

諸井　三郎

展示	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号		禁帯
★	近代日本を創った百人　下		毎日新聞社	1966	281	キ	
★	ベートーベン　不滅の芸術と楽聖の生涯　（新潮文庫）	諸井　三郎／著	新潮社	1982	762.3	ベ	
★	音楽構造の研究　上巻	諸井　三郎／著	音楽之友社	1991	761	モ	
★	音楽構造の研究　中巻	諸井　三郎／著	音楽之友社	1991	761	モ	
★	音楽構造の研究　下巻	諸井　三郎／著	音楽之友社	1991	761	モ	

長谷川　泰子

展示	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号		禁帯
★	大岡昇平全集　別巻	大岡　昇平／著	筑摩書房	1996	918.68	オオ	
★	埴谷雄高全集　６　影絵の世界	埴谷　雄高／著	講談社	1999	918.68	ハニ	
★	中原中也との愛　ゆきてかへらぬ　（角川ソフィア文庫）	長谷川　泰子／述 村上　護／編	角川学芸出版	2006	911.52	ナ	
★	新・日本文壇史　第3巻　昭和文壇の形成	川西　政明／著	岩波書店	2010	910.26	カ	

安原　喜弘

展示	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号		禁帯
★	中原中也の手紙	安原　喜弘／編著	青土社	2000	911.52	ナ	
★	中原中也の手紙―安原喜弘との交友　中原中也記念館特別企画展	中原中也記念館／編集	中原中也記念館	2012	911.52	ナ	◎

第15回中野区ゆかりの著作者紹介展示
「中也と中野と中央線」 ブックリスト　中央線

中央線 （請求記号順）

展示	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号		禁帯
★	定本　庄司浅水著作集　書誌篇　第1巻　世界の古本屋	庄司　浅水／著	出版ニュース社	1979	020.8	シ	
★	東京古書店グラフィティ	池谷　伊佐夫／著	東京書籍	1996	024.8	イ	
★	東京お寺も～で　楽しい仏教ワールドのおすすめスポット！！	此経　啓助[ほか]／著	日本地域社会研究所	2004	185.9	コ	
★	中央線がなかったら　見えてくる東京の古層	陣内　秀信[ほか]／編著	NTT出版	2012	213.6	チ	
★	あのころangle街と地図の大特集１９７９　４０年前の東京にタイムスリップ！	主婦と生活社／編	主婦と生活社	2018	213.6	ア	
★	酒と温泉を楽しむ！「Ｂ級」山歩き　（光文社知恵の森文庫）	山田　稔／著	光文社	2014	291.09	ヤ	
★	空から各駅停車　中央線	東京地勢堂編集部／編	東京地勢堂	1990	291.3	ソ	
★	東京発日帰り山さんぽ50		交通新聞社	2017	291.3	ト	
★	中央線各駅停車　（カラーブックス）	宮脇　俊三[ほか]／著	保育社	1985	291.36	ミ	
★	中央線の呪い　（扶桑社文庫）	三善　里沙子／著	扶桑社	1999	291.36	ミ	
★	中央線全駅ぶらり散歩　（持ち歩き旅の手帖　沿線散歩シリーズ）		交通新聞社	2002	291.36	チ	
★	THE中央線案内　（散歩の達人エリア版MOOK）		交通新聞社	2003	291.36	ザ	
★	中央線なヒト　沿線文化人類学　（小学館文庫）	三善　里沙子／著	小学館	2003	291.36	ミ	
★	中央線　カルチャー魔境の歩き方　（ダ・ヴィンチ特別編集）	G. B. ／著	メディアファクトリー	2004	291.36	ジ	
★	中央線の詩　上	朝日新聞東京総局／著	出窓社	2005	291.36	ア	
★	中央線の詩　下	朝日新聞東京総局／著	出窓社	2006	291.36	ア	
★	たのしい中央線		太田出版	2005	291.36	タ	
★	たのしい中央線　２		太田出版	2006	291.36	タ	
★	たのしい中央線　３		太田出版	2006	291.36	タ	
★	たのしい中央線　４		太田出版	2007	291.36	タ	
★	たのしい中央線　５		太田出版	2008	291.36	タ	
★	多摩よりみち散歩	雪子　F. グレイセング／著	けやき出版	2009	291.36	グ	
★	鉄道沿線をゆく大人の東京散歩　（河出文庫）	鈴木　伸子／著	河出書房新社	2010	291.36	ス	
★	みんなの中央線案内　（散歩の達人エリア版MOOK）		交通新聞社	2011	291.36	ミ	
★	高尾・陣馬・中央線日帰り山あるき　（ブルーガイド　ぶらり山散歩）	桑子　登／著	実業之日本社	2012	291.36	ク	
★	日常を旅する　中央線三鷹～立川エリアを楽しむガイドブック		けやき出版	2015	291.36	ニ	
★	中央線をゆく、大人の町歩き　鉄道、地形、歴史、食　（河出文庫）	鈴木　伸子／著	河出書房新社	2017	291.36	ス	
★	中央線で行く山歩き＆ハイキング　（COSMIC　MOOK）		コスミック出版	2018	291.36	チ	
★	ひとり中央線各駅さんぽ　（スターツムック　オズマガジンMOOK）		スターツ出版	2018	291.36	ヒ	
★	車窓の山旅　中央線から見える山　（じっぴコンパクト文庫）	山村　正光／著	実業之日本社	2017	291.51	ヤ	
★	各駅停車中央線の旅	川合　宣雄／著	けやき出版	1988	291.52	カ	
★	一日の山・中央線私の山旅	横山　厚夫／著	実業之日本社	1986	291.56	ヨ	
★	東京凸凹地形案内　３　地形と鉄道　（別冊太陽　太陽の地図帖）	今尾　恵介／著	平凡社	2013	454.9	ト	
★	国鉄の車両　９　中央線		保育社	1983	536	コ	
★	中央線の名列車　（イカロスMOOK　新・名列車列伝シリーズ）		イカロス出版	2005	536	チ	

★	E231／E233 Hyper Detail 209系／217系／E231系／E233系／E501系／E531系 （イカロスMOOK）		イカロス出版	2008	546.5	イ	
★	中央線とdancyu （プレジデントムック）		プレジデント社	2015	596	チ	
★	中央線のスゴい肉 ＋総武線 絶対に行きたい205店掲載 （マイナビムック）		マイナビ出版	2016	596.3	チ	
★	中央線で行く東京横断ホッピーマラソン （ちくま文庫）	大竹 聡／著	筑摩書房	2009	596.7	オ	
★	高円寺カフェ 中野から西荻窪に至る中央線カフェに潜行せよ （Grafis Mook Café.mag）		グラフィス	2011	596.7	コ	
★	明治・大正・昭和駅弁ラベル大図鑑	羽島 知之／著	国書刊行会	2014	675.1	メ	
★	絵葉書に見る交通風俗史 明治・大正・昭和初期の乗り物原風景 （JTBキャンブックス）	原口 隆行／著	JTB	2002	682.1	ハ	
★	全国鉄道博物館 鉄道文化の殿堂「鉄道博物館」＆全国の施設セレクト30	白川 淳／著	JTBパブリッシング	2007	686.0	シ	
★	鉄道浪曼派黄昏の中央線 市ケ谷駅憶説・写楽はインテリだった	日永 藤佐／著	文芸社	2013	686.0	ヒ	
★	中央線誕生 東京を一直線に貫く鉄道の謎 （交通新聞社新書）	中村 建治／著	交通新聞社	2016	686.0	ナ	
★	中央線 東京の動脈いまむかし	朝日新聞社会部／編	朝日ソノラマ	1975	686.2	チ	
★	鉄道－明治創業回顧談	沢 和哉／編著	築地書館	1981	686.2	サ	
★	日本鉄道名所 勾配・曲線の旅 5 中央線. 上越線. 信越線	宮脇 俊三／著	小学館	1986	686.2	ニ	
★	JR・私鉄全線各駅停車 4 関東700駅	宮脇 俊三[ほか]／編	小学館	1993	686.2	ジ	
★	全国鉄道事情大研究 東京西部・神奈川篇1	川島 令三／著	草思社	1998	686.2	カ	
★	タイムスリップ中央線	巴川 享則[ほか]／著	大正出版	2003	686.2	ハ	
★	まるごと一冊中央本線の旅 全線424．6km全駅112駅実踏調査 （Gakken mook）		学研	2004	686.2	マ	
★	中央線オレンジ色の電車今昔50年 甲武鉄道の開業から120年のあゆみ （キャンブックス 鉄道）	三好 好三[ほか]／著	JTBパブリッシング	2008	686.2	チ	
★	中央線街と駅の120年 中央線沿線の歴史を伝える貴重な資料が満	三好 好三／編著	JTBパブリッシング	2009	686.2	ミ	
★	東京の鉄道遺産 百四十年をあるく 上 創業期篇	山田 俊明／著	けやき出版	2010	686.2	ヤ	
★	中央線思い出コレクション	沼本 忠次／著	けやき出版	2010	686.2	ヌ	
★	絵葉書でつづる中央線今昔ものがたり 古絵葉書で楽しむ古き良き鉄道の情景	白土 貞夫／著	枻出版社	2011	686.2	シ	
★	JR中央線あるある	増山 かおり／著	TOブックス	2014	686.2	マ	
★	JR中央線 街と駅の1世紀 （懐かしい沿線写真で訪ねる）	生田 誠／著	彩流社	2014	686.2	イ	
★	JR中央線の謎学 （KAWADE夢文庫）	ロム・インターナショナル／著	河出書房新社	2015	686.2	ジ	
★	国鉄末期の首都圏鉄道模様 懐かしいあの頃の鉄道と街並み	山口 雅人／著	イカロス出版	2016	686.2	ヤ	
★	JR中央線・青梅線・五日市線各駅停車 東京都心＆武蔵野、多摩西部・奥多摩を結ぶ歴史と魅力がまるわかり！	山田 亮／著	洋泉社	2016	686.2	ヤ	
★	朝日新聞社機が撮った中央線の街と駅 1960～80年代	矢嶋 秀一／著	フォト・パブリッシング	2017	686.2	ヤ	
★	全国通勤電車大解剖 満員電車を解消することはできるのか？ （〈図説〉日本の鉄道）	川島 令三／著	講談社	2018	686.2	カ	
★	鉄道写真が語る昭和 （旅鉄BOOKS）	「旅と鉄道」編集部／編	天夢人	2018	686.2	テ	
★	史料鉄道時刻表 明治四年～二十六年	鉄道史録会／編	大正出版	1981	686.5	シ	

★	日本国有鉄道　停車場一覧　昭和60年6月1日現在	日本国有鉄道旅客局／編	日本交通公社	1985	686.5	ニ	
★	駅物語　旅のスケッチ　JR東日本編	大須賀　一雄／著	日貿出版社	1995	686.5	オ	
★	JR全線全駅　　最新改訂版　（トラベルムック）		弘済出版社	1997	686.5	ジ	
★	1700の肖像　JR東日本全駅写真集		ジェイアール東日本建築設計事務所	2009	686.5	セ	
★	日本の駅　写真記録	鉄道ジャーナル社／編	日本図書センターP＆	2009	686.5	ニ	
★	世界の駅・日本の駅	小池　滋［ほか］／編	悠書館	2010	686.5	セ	
★	東京消えた！全97駅　写真・きっぷ・地図でひもとく首都廃駅のすべて（イカロスMOOK）	中村　建治／著	イカロス出版	2015	686.5	ナ	
★	関東大震災・国有鉄道震災日誌	鉄道省／編	日本経済評論社	2011	686.7	カ	
★	子どもたちの視線	新間　陽子／著	新間　陽子	2005	748	シ	
★	中央線ジャズ決定盤101　極私的こだわりジャズ・ディスク・ガイド　（CDジャーナルムック　SUPER　Disc　SELECTION）	明田川　荘之／監修	音楽出版社	2008	764.7	チ	
★	新鉄道唱歌　第5輯　高崎・信越・中央線	鉄道省／編	国書刊行会	1987	767.7	シ	
★	鉄道にみる中野の歴史　平成10年10月　10周年特別企画展	中野区立歴史民俗資料館／編著	中野区				
★	JR中央線沿線の不思議と謎　東京近郊編　（じっぴコンパクト新書）	天野　宏司／著	実業之日本社	2018	E86	D	
★	中野区の30年	中野区役所／編	中野区役所	1962	N1	A	

中央線沿いに暮らした作家　（著者順）

	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号		
	青柳瑞穂						
★	人間について　改版　（新潮文庫）	ボーヴォワール／著 青柳　瑞穂／訳	新潮社	2005	954	ボ	
★	モーパッサン短編集　1　改版　（新潮文庫）	モーパッサン／著 青柳　瑞穂／訳	新潮社	2013	953	モパ	
★	マルドロオルの歌　（講談社文芸文庫　現代日本の翻訳）	ロオトレアモン／著 青柳　瑞穂／訳	講談社	1994	951	ロ	
	ささやかな日本発掘　（講談社文芸文庫）	青柳　瑞穂／著	講談社	1990	914.6	アオ	
	石井桃子						
	ノンちゃん雲に乗る	石井　桃子／著	光文社	2005	913.6	イシ	
★	みがけば光る	石井　桃子／著	河出書房新社	2013	914.6	イシ	
★	新しいおとな	石井　桃子／著	河出書房新社	2014	914.6	イシ	
	伊藤整						
	小説の方法　（筑摩叢書）	伊藤　整／著	筑摩書房	1989	901.3	イ	
★	伊藤整	桶谷　秀昭／著	新潮社	1994	910.268	イト	
★	犬　クラフト・エヴィング商會プレゼンツ　（中公文庫）	伊藤　整［ほか］／著	中央公論新社	2009	645.6	イ	
	近代日本の文学史	伊藤　整／著	夏葉社	2012	910.26	イ	
	井伏鱒二						
★	黒い雨	井伏　鱒二／著	新潮社	1995	913.6	イブ	
	井伏鱒二全対談　上・下巻	井伏　鱒二［ほか］／著	筑摩書房	2001	914.6	イブ	

	さざなみ軍記・ジョン万次郎漂流記　改版　（新潮文庫）	井伏　鱒二／著	新潮社	2012	913.6	イブ	
★	荻窪風土記　改版　（新潮文庫）	井伏　鱒二／著	新潮社	2014	914.6	イブ	
★	長寿の献立帖　あの人は何を食べてきたのか　（角川新書）	樋口　直哉／著	KADOKAWA	2017	498.5	ヒ	
★	人生散歩術　こんなガンバラナイ生き方もある	岡崎　武志／著	芸術新聞社	2017	910.26	オ	
★	やばい老人になろう　やんちゃでちょうどいい	さだ　まさし／著	PHP研究所	2017	914.6	サダ	
★	珍品堂主人　増補新版　（中公文庫）	井伏　鱒二／著	中央公論新社	2018	913.6	イブ	
	伊馬春部						
★	20世紀の戯曲　2　現代戯曲の展開	日本演劇学界・日本近代演劇史研究会／編	社会評論社	2002	912	ニ	
★	現代語訳東海道中膝栗毛　上下　（岩波現代文庫　文芸）	十返舎　一九／作 伊馬　春部／訳	岩波書店	2014	913.55	ジ	
	巌谷大四						
	瓦版　昭和文壇史	巌谷　大四／著	時事通信社	1978	910.26	イ	
★	東京文壇事始　（講談社学術文庫）	巌谷　大四／著	講談社	2004	910.26	イ	
	臼井吉見						
★	小説の味わい方	臼井　吉見／著	新潮社	1962	914.6	ウス	
★	臼井吉見集　全5巻	臼井　吉見／著	筑摩書房	1985	914.6	ウス	
	大倉桃郎						
	大衆文学大系　3　村井弦斎・村上浪六・塚原渋柿園・碧瑠璃園・大倉桃	大仏　次郎[ほか]／監修	講談社	1971	913.68	タ	
★	少年小説大系　第14巻　大正少年小説集	尾崎　秀樹[ほか]／監修	三一書房	1995	913.68	シ	
	大田黒元雄						
★	歌劇大事典　増補版	大田黒　元雄／著	音楽之友社	1987	766.0	オ	
	大宅壮一						
★	大宅壮一のカメラ万年筆　メモを撮る1954→1961	大宅　壮一／写真	平凡社	1982	748	オ	
★	「無思想人」宣言　（講談社学術文庫）	大宅　壮一／著	講談社	1990	304	オ	
★	無思想の思想　大宅壮一・一巻選集	大宅　壮一／著	文芸春秋	1991	914.6	オオ	
	小川未明						
	小川未明童話集　（岩波文庫）	小川　未明／著 桑原　三郎／編	岩波書店	1996	913.6	オガ	
★	小川未明新収童話集　全6巻	小川　未明／著 小埜　裕二／編	日外アソシエーツ	2014	913.6	オガ	
	小田嶽夫						
	魯迅伝　（大和選書）	小田　岳夫／著	大和書房	1966	920.2	オ	
★	城外　夜ざくらと雪　小田岳夫作品集	小田　岳夫／著	青英舎	1980	913.6	オダ	
★	三笠山の月　小田岳夫作品集	小田　岳夫／著	小沢書店	2000	918.68	オダ	
	恩地孝四郎						
★	装本の使命　恩地孝四郎装幀美術論集	恩地　孝四郎／著	阿部出版	1992	022.5	オ	
★	恩地孝四郎詩集	恩地　孝四郎／著	六興出版	1977	911.56	オ	
	亀井勝一郎						
	大和古寺風物誌	亀井　勝一郎／著 入江　泰吉／写真	大和書房	1971	915.6	カメ	
★	青春論　改版　（角川ソフィア文庫）	亀井　勝一郎／著	KADOKAWA	2014	914.6	カメ	

★	人間の心得　自覚すること認識すること　愛蔵版	亀井　勝一郎／著	青春出版社	1981	914.6	カメ	
★	日本の古代を読む　（文春学藝ライブラリー　思想）	上野　誠／編	文藝春秋	2016	210.3	ニ	
	川崎小虎						
★	川崎小虎画集	川崎　小虎／画	京都書院	1987	721.9	カ	
	河盛好藏						
	文学空談	河盛　好蔵／著	文芸春秋新社	1965	904	カ	
★	河盛好蔵私の随想選　全7巻	河盛　好蔵／著	新潮社	1991	914.6	カワ	
	パリの憂愁　ボードレールとその時代	河盛　好蔵／著	河出書房新社	1991	951	ボ	
	上林暁						
	白い屋形船・ブロンズの首　（講談社文芸文庫）	上林　暁／著	講談社	1990	913.6	カン	
★	星を撒いた街　上林暁傑作小説集	上林　暁／著	夏葉社	2011	913.6	カン	
★	「酒」と作家たち　（中公文庫）	浦西　和彦／編	中央公論新社	2012	910.26	サ	
★	ツェッペリン飛行船と黙想	上林　暁／著	幻戯書房	2012	918.68	カン	
	北原白秋						
★	北原白秋詩集　（現代詩文庫）	北原　白秋／著	思潮社	1975	911.56	キ	
★	作家の自伝　27　北原白秋　（シリーズ・人間図書館）	佐伯　彰一［ほか］／監修	日本図書センター	1995	910.268	キタ	
★	北原白秋詩集　上・下　（岩波文庫）	北原　白秋／著	岩波書店	2007	911.56	キ	
	木山捷平						
	耳学問・尋三の春 他十一編　（旺文社文庫）	木山　捷平／著	旺文社	1979	913.6	キヤ	
	白兎・苦いお茶・無門庵　（講談社文芸文庫）	木山　捷平／著	講談社	1995	913.6	キヤ	
	大陸の細道　（講談社文芸文庫）	木山　捷平／著	講談社	2011	913.6	キヤ	
★	長春五馬路　（講談社文芸文庫Wide）	木山　捷平／著	講談社	2016	913.6	キヤ	
	金田一京助						
★	ユーカラの人びと　（平凡社ライブラリー　金田一京助の世界）	金田一　京助／著	平凡社	2004	382.1	キ	
★	大きな活字の三省堂国語辞典　第6版	金田一　京助［ほか］／編	三省堂	2008	813.1	オ	
	蔵原伸二郎						
	日本の詩歌　24　新訂版　丸山薫　田中冬二　立原道造　田中克己　蔵原伸二郎	蔵原　伸二郎［ほか］／著	中央公論社	1979	911.0	ニ	
★	大木惇夫／蔵原伸二郎　（近代浪漫派文庫）	大木　惇夫／著 蔵原　伸二郎／著	新学社	2005	911.56	オ	
	小島烏水						
★	日本アルプス　山岳紀行文集　（岩波文庫）	小島　烏水／著	岩波書店	1992	291.5	コ	
★	アルピニストの手記　（平凡社ライブラリー）	小島　烏水／著	平凡社	1996	786.1	コ	
	小林多喜二						
★	蟹工船　（まんがで読破）	小林　多喜二／原作	イースト・プレス	2007	726.1	マ	
★	劇画「蟹工船」小林多喜二の世界　（講談社＋α 文庫）	小林　多喜二／原作	講談社	2008	726.1	ゲ	
★	ガイドブック小林多喜二の東京　1930～1933	「ガイドブック小林多喜二の東京」編集委員会／編	学習の友社	2008	910.268	コバ	
★	蟹工船・党生活者　新装改版　（角川文庫）	小林　多喜二／著	角川書店	2008	913.6	コバ	
★	小林多喜二と『蟹工船』　（KAWADE道の手帖）		河出書房新社	2008	913.6	コバ	
	芝木好子						
★	冬の梅	芝木　好子／著	新潮社	1991	913.6	シバ	

★	湯葉・青磁砧　（講談社文芸文庫）	芝木　好子／著	講談社	2000	913.6	シバ	
	渋川驍						
★	銀色の線路	渋川　驍／著	青桐書房	1987	913.6	シブ	
	書庫のキャレル　文学者と図書館	渋川　驍／著	制作同人社	1997	010.4	シ	
	下村千秋						
★	コレクション戦争と文学　１　朝鮮戦争	浅田　次郎［ほか］／編集委員	集英社	2012	918.6	コ	
	新庄嘉章						
★	女の学校・ロベール　（新潮文庫）	アンドレ・ジッド／著 新庄　嘉章／訳	新潮社	1972	953	ジド	
	天国と地獄の結婚　ジッドとマドレーヌ	新庄　嘉章／著	集英社	1983	950.2	ジ	
★	苦悩の英雄ベートーヴェンの生涯　（角川文庫）	ロマン・ロラン／著 新庄　嘉章／訳	角川書店	1995	762.3	ベ	
	住井すゑ						
★	牛久沼のほとり	住井　すゑ／著	暮しの手帖社	1983	914.6	スミ	
★	わが生涯　生きて愛して闘って	住井　すゑ／著	岩波書店	1995	910.268	スミ	
	橋のない川　１　改版　（新潮文庫）	住井　すゑ／著	新潮社	2003	913.6	スミ	
	田河　水泡						
	芸術家の独創　（日経ビジネス人文庫　私の履歴書）	田河　水泡［ほか］／著	日本経済新聞社出版社	2008	702.1	ゲ	
★	田河水泡　のらくろ一代記　（人間の記録）	田河　水泡／著	日本図書センター	2010	726.1	タ	
	のらくろ一代記　田河水泡自叙伝	田河　水泡／著	講談社	1991	726.1	タ	
	永遠（とこしえ）のふたり　夫・田河水泡と兄・小林秀雄	高見沢　潤子／著	講談社	1991	914.6	タカ	
★	のらくろ喫茶店	田河　水泡／著	復刊ドットコム	2012	726.1	タ	
	のらくろ自叙伝	田河　水泡／著	光人社	1983	726.1	タ	
	立野信之						
★	立野信之集　（房総文芸選集）	立野　信之／著	あさひふれんど千葉	1991	913.6	タテ	
★	黒い花　上巻・下巻	立野　信之／著	ぺりかん社	1974	913.6	タテ	
	田部重治						
★	日本山岳名著全集　２　日本アルプスと秩父巡礼	田部　重治［ほか］／監修	あかね書房	1966	291.09	ニ	
★	獄中記　改訂版　（角川文庫ソフィア）	オスカー・ワイルド／著 田部　重治／訳	角川書店	1998	934	ワ	
	谷川徹三						
	日本文芸鑑賞事典　５　近代名作1017選への招待	石本　隆一［ほか］／編纂	ぎょうせい	1987	910.26	ニ	
★	母の恋文　谷川徹三・多喜子の手紙　大正十年八月～大正十二年七月	谷川　徹三／著 谷川　多喜子／著 谷川　俊太郎／編	新潮社	1994	915.6	タニ	
	田畑修一郎						
★	田畑修一郎全集　全3巻	田畑　修一郎／著	冬夏書房	1980	918.68	タバ	
	田宮虎彦						
★	落城	田宮　虎彦／著	六興出版	1979	913.6	タミ	
★	寛永主従記	田宮　虎彦／著	明治書院	2010	913.6	タミ	
★	足摺岬　田宮虎彦作品集　（講談社文芸文庫）	田宮　虎彦／著	講談社	1999	913.6	タミ	

★	愛のかたみ	田宮　虎彦／著 田宮　千代／著	光文社	1957	915.6	タミ	
	近松秋江						
★	黒髪　（文芸選書）	近松　秋江／著	福武書店	1983	913.6	チカ	
★	黒髪・別れたる妻に送る手紙　（講談社文芸文庫）	近松　秋江／著	講談社	1997	913.6	チカ	
	津田青楓						
	漱石と十弟子	津田　青楓／著	芸艸堂	1974	910.268	ナツ	
★	津田青楓デッサン集　裸婦　（双書美術の泉）	津田　青楓／著	岩崎美術社	1976	723.1	ツ	
★	津田青楓の図案　芸術とデザイン　（近代図案コレクション）	津田　青楓／著	芸艸堂	2008	727.0	ツ	
	徳川夢声						
	夢声戦争日記　全5巻	徳川　夢声／著	中央公論社	1960	772.1	ト	
★	話術	徳川　夢声／著	白揚社	1996	809.2	ト	
★	夢声の動物記	徳川　夢声／著	六興出版	1983	914.6	トク	
	戸坂潤						
	日本イデオロギー論　（岩波文庫）	戸坂　潤／著	岩波書店	1982	121.6	ト	
★	認識論	戸坂　潤／著	青木書店	1989	115	ト	
★	思想としての文学　（近代文芸評論叢書）	戸坂　潤／著	日本図書センター	1992	904	ト	
	外村繁						
	現代日本文学大系　63　梶井基次郎　外村繁　中島敦集	外村　繁［ほか］／著	筑摩書房	1970	918.6	ゲ	
★	澪標・落日の光景　（講談社文芸文庫）	外村　繁／著	講談社	1992	913.6	トノ	
	富田常雄						
★	姿三四郎　上巻・下巻	富田　常雄／著	東京文芸社	1986	913.6	トミ	
	消えた受賞作　直木賞編　（ダ・ヴィンチ特別編集）	川口　則弘／編著	メディアファクトリー	2004	913.68	キ	
	中川一政						
★	うちには猛犬がいる　（中公文庫）	中川　一政／著	中央公論社	1988	914.6	ナカ	
★	我思古人　（講談社文芸文庫　現代日本のエッセイ）	中川　一政／著	講談社	1990	914.6	ナカ	
	中谷孝雄						
★	招魂の賦　（講談社文芸文庫）	中谷　孝雄／著	講談社	1998	913.6	ナカ	
★	わが陶淵明	中谷　孝雄／著	筑摩書房	1974	921.4	ナ	
	中野好夫						
★	伝記文学の面白さ　（同時代ライブラリー）	中野　好夫／著	岩波書店	1995	904	ナ	
★	シェイクスピアの面白さ　（講談社文芸文庫）	中野　好夫／著	講談社	2017	932	シ	
	中山省三郎						
★	猟人日記　上巻・下巻　（角川文庫）	ツルゲーネフ／著 中山　省三郎／訳	角川書店	1990	983	ツ	
	新居格						
	アナキズム関係論文集　社会問題講座	新居　格［ほか］／著	黒色戦線社	1991	309.7	ア	
★	杉並区長日記　地方自治の先駆者・新居格	新居　格／著	虹霓社	2017	318.2	ニ	
	額田六福						
	日本戯曲全集　第37巻　現代篇		春陽堂	1928	912.0	ニ	◎
★	捕物時代小説選集　1　朱房の鬼　（春陽文庫）	志村　有弘／編	春陽堂書店	1999	913.68	ト	
	橋本明治						

★	竜の落とし子	橋本　明治／著	日本経済新聞社	1979	721	ハ	
★	アサヒグラフ別冊　1980　夏　美術特集　橋本明治		朝日新聞社	1980	720.8	ア	
	現代日本画全集　第10巻　橋本明治	座右宝刊行会／編集	集英社	1982	721.0	ゲ	
	長谷川海太郎						
	踊る地平線　めりけんじゃっぷ長谷川海太郎伝	室　譲二／著	晶文社	1985	910.268	ハセ	
	谷譲次テキサス無宿／キキ　（大人の本棚）	谷　譲次／著	みすず書房	2003	913.6	タニ	
	林不忘探偵小説選　（論創ミステリ叢書）	林　不忘／著	論創社	2007	913.6	ハヤ	
	牧逸馬探偵小説選　（論創ミステリ叢書）	牧　逸馬／著	論創社	2007	913.6	マキ	
	世界怪奇実話　（大衆文学館）	牧　逸馬／著	講談社	1997	913.6	マキ	
	谷譲次　めりけんじゃっぷ一代記　（叢書新青年）	谷　譲次／著	博文館新社	1995	918.68	タニ	
	『丹下左膳』を読む　長谷川海太郎の仕事	工藤　英太郎／著	西田書店	1998	913.6	ハセ	
	長谷川潾二郎						
	静かな奇譚　長谷川潾二郎画文集	長谷川潾二郎／著	求竜堂	2010	723.1	ハ	
	林房雄						
	現代日本文学大系　61　林房雄・亀井勝一郎・保田與重郎・蓮田善明集	林　房雄［ほか］／著	筑摩書房	1970	918.6	ゲ	
★	大東亜戦争肯定論　（中公文庫）	林　房雄／著	中央公論新社	2014	210.6	ハ	
★	天皇の起原　（天山文庫）	林　房雄／著	天山出版	1988	288.4	ハ	
	葉山嘉樹						
	海に生くる人々（岩波文庫）	葉山　嘉樹／著	岩波書店	1979	913.6	ハヤ	
★	葉山嘉樹短編小説選集	葉山　嘉樹／著	郷土出版社	1997	913.6	ハヤ	
★	セメント樽の中の手紙ほか　プロレタリア文学　（ちくま文庫　教科書で読む原作）	葉山　嘉樹／著	筑摩書房	2017	913.68	セ	
	日夏耿之介						
	明治浪曼文学史	日夏　耿之介／著	中央公論社	1968	910.26	ヒ	
★	日夏耿之介文集　（ちくま学芸文庫）	日夏　耿之介／著	筑摩書房	2004	914.6	ヒナ	
	火野葦平						
	麦と兵隊　ほか8編　（火野葦平兵隊小説文庫）	火野　葦平／著	光文社	1978	913.6	ヒノ	
★	悲しき兵隊　ほか7編　（火野葦平兵隊小説文庫）	火野　葦平／著	光人社	1980	913.6	ヒノ	
	福田清人						
	天平の少年　奈良の大仏建立／乱世に生きる二人　（講談社青い鳥文庫　日本の歴史名作シリーズ）	福田　清人／著	講談社	1988	913	フ	
★	俳諧つれづれ草　私の俳句歳時記	福田　清人／著	明治書院	1989	911.30	フ	
★	福田清人・人と文学「福田清人文庫の集い」講演集	立教女学院短期大学図書館／編	鼎書房	2011	910.268	フク	
	藤原審爾						
★	赤い殺意／罪な女　（大衆文学館）	藤原　審爾／著	講談社	1997	913.6	フジ	
★	秋津温泉　（集英社文庫）	藤原　審爾／著	集英社	1983	913.6	フジ	
	古谷綱武						
★	教育に生涯をかけた婦人たち	古谷　綱武／著	明治図書	1969	372.8	フ	
★	古谷綱武　（日本人の知性）	古谷　綱武／著	学術出版会	2010	914.6	フル	
	前田夕暮						

★	日本の詩歌　7　新訂版　太田水穂　前田夕暮　川田順　木下利玄　尾山篤二郎	前田　夕暮[ほか]／著	中央公論社	1979	911	ニ	
	前田夕暮の秀歌　（現代短歌鑑賞シリーズ）	香川　進／著	短歌新聞社	1985	911.16	マ	
	松本恵子						
	松本恵子探偵小説選　（論創ミステリ叢書）	松本　恵子／著	論創社	2004	913.6	マツ	
	松本泰						
	松本泰探偵小説選　１　（論創ミステリ叢書）	松本　泰／著	論創社	2004	913.6	マツ	
	松本泰探偵小説選　２　（論創ミステリ叢書）	松本　泰／著	論創社	2004	913.6	マツ	
	松本泰探偵小説選　３　（論創ミステリ叢書）	松本　泰／著	論創社	2017	913.6	マツ	
	三木清						
	パスカルにおける人間の研究　（岩波文庫）	三木　清／著	岩波書店	1980	135.2	ミ	
★	人生論ノート　改版　（新潮文庫）	三木　清／著	新潮社	2011	121.6	ミ	
★	読書と人生　（講談社文芸文庫）	三木　清／著	講談社	2013	019	ミ	
	三好達治						
★	測量船　（講談社文芸文庫）	三好　達治／著	講談社	1996	911.56	ミ	
★	三好達治詩集　（小沢クラシックス＜世界の詩＞　日本詩人選）	三好　達治／著	小沢書店	1997	911.56	ミ	
	棟方志功						
	板極道　（中公文庫）	棟方　志功／著	中央公論新社	1976	732.1	ム	
★	もっと知りたい棟方志功　生涯と作品　（アート・ビギナーズ・コレクション）	石井　頼子／著	東京美術	2016	732.1	ム	
	村上菊一郎						
★	ボヴァリー夫人　（集英社コンパクトブックス世界の名作）	G. フローベール／著 村上　菊一郎／訳	集英社	1969	953	フ	
	保田与重郎						
★	保田与重郎文芸論集　（講談社文芸文庫）	保田　与重郎／著	講談社	1999	910.4	ヤ	
★	わが萬葉集　（文春学藝ライブラリー　思想）	保田　与重郎／著	文藝春秋	2013	911.12	ヤ	
	安成二郎						
★	無政府地獄　大杉栄襍記	安成　二郎／著	新泉社	1973	289.1	オ	
	横光利一						
	日輪・春は馬車に乗って　他8篇　（岩波文庫）	横光　利一／著	岩波書店	1982	913.6	ヨコ	
	上海　改版　（岩波文庫）	横光　利一／著	岩波書店	2008	913.6	ヨコ	
★	旅愁　上・下　（岩波文庫）	横光　利一／著	岩波書店	2016	913.6	ヨコ	
	与謝野晶子						
★	与謝野晶子児童文学全集　５　私の生い立ち	与謝野　晶子／著	春陽堂書店	2007	918.68	ヨサ	
	新選与謝野晶子歌集　（講談社文芸文庫）	与謝野　晶子／著 道浦　母都子／選	講談社	2008	911.16	ヨ	
	与謝野寛						
	日本の詩歌　４　新訂版　与謝野鉄幹　与謝野晶子　若山牧水　吉井勇	与謝野　鉄幹[ほか]／著	中央公論社	1979	911.0	ニ	
★	名著複刻詩歌文学館　紫陽花セット　［2］　相聞	名著複刻全集編集委員会／編集	日本近代文学館	1983	911	Me22	
	淀野隆三						
★	朝のコント　（岩波文庫）	フィリップ／著 淀野　隆三／訳	岩波書店	1961	953	フイ	

★	小さき町にて　フィリップ短篇集　（岩波文庫）	フィリップ／著 淀野　隆三／訳	岩波書店	1972	953	フイ	
	失われた時を求めて　1　スワンの恋	マルセル・プルースト／著 淀野　隆三／訳 井上　究一郎／訳	新潮社	1980	953	プ	
	「阿佐ケ谷会」文学アルバム	青柳　いづみこ［ほか］／監修	幻戯書房	2007	910.26	ア	
★	物語城西消費組合　生協運動の源流をつくった人びと	河田　禎之／著	労働旬報社	1994	365.8	カ	
★	阿佐ヶ谷文士村	杉並区立中央図書館／編	杉並区立中央図書館	1993	Q90	B	
★	谷戸に文化村があったころ　探偵作家 松本泰・松本恵子と文士たち 中野区ゆかりの著作者紹介	中野区立中央図書館	中野区立中央図書館	2013	Q90	A	
★	言わなければよかったのに日記　　改版（中公文庫）	深沢　七郎／著	中央公論新社	2017	914.6	フカ	
	阿佐ヶ谷貧乏物語	真尾　悦子／著	筑摩書房	1994	Q94	B	
★	阿佐ケ谷界隈　文壇資料	村上　護／著	講談社	1977	910.26	ム	
★	阿佐ケ谷文士村	村上　護／著	春陽堂書店	1993	910.26	ム	

中央線が出てくる小説・エッセイ （出版年順）

	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号		
	松本清張全集　５　砂の器	松本　清張／著	文藝春秋	1971	918.68	マツ	
	松本清張全集　１８　波の塔	松本　清張／著	文藝春秋	1972	918.68	マツ	
	風立ちぬ・菜穂子　（日本の文学67）	堀　辰雄／著	ほるぷ出版	1985	918.6	ニ	
★	居場所もなかった	笙野　頼子／著	講談社	1993	913.6	シヨ	
★	白戸修の事件簿　（双葉文庫）	大倉　崇裕／著	双葉社	2005	913.6	オオ	
★	ぼくの早稲田時代	川崎　彰彦／著	右文書院	2005	913.6	カワ	
★	友部正人詩集　（現代詩文庫）	友部　正人／著	思潮社	2006	911.56	ト	
★	ドラママチ	角田　光代／著	文藝春秋	2006	913.6	カク	
★	中央線で猫とぼく　あの日、あのコと目があって	北尾　トロ／著	メディアファクトリー	2008	645.7	キ	
★	十津川警部「悪夢」通勤快速の罠　（講談社文庫）	西村　京太郎／著	講談社	2008	913.6	ニシ	
★	だいだい色の箱　中央沿線物語	曠野　すぐり／著	まつやま書房	2009	913.6	ヒロ	
★	活字と自活	荻原　魚雷／著	本の雑誌社	2010	914.6	オギ	
	私小説名作選　上　（講談社文芸文庫） 「少女病」　田山花袋	中村　光夫／選 日本ペンクラブ／編	講談社	2012	913.68	ワ	
★	天下の雨敬、明治を拓く　鉄道王雨宮敬次郎の生涯	江宮　隆之／著	河出書房新社	2012	913.6	エミ	
★	白戸修の逃亡	大倉　崇裕／著	双葉社	2013	913.6	オオ	
★	中央線に乗っていた男　（角川文庫）	西村　京太郎／著	KADOKAWA	2014	913.6	ニシ	
★	鉄童の旅	佐川　光晴／著	実業之日本社	2014	913.6	サガ	
★	止まりだしたら走らない	品田　遊／著	リトルモア	2015	913.6	シナ	
	愛より優しい旅の空　（角川文庫）	柴田　よしき／著	KADOKAWA	2015	913.6	シバ	
★	裏切りの中央本線	西村　京太郎／著	KADOKAWA	2017	913.6	ニシ	

資料協力（敬称略）

中原中也記念館

株式会社 文房堂

公益財団法人たましん地域文化財団

杉並区立郷土博物館

中野区政策室広報分野

第 15 回中野区ゆかりの著作者紹介展示

中也と中野と中央線

発行年月日　2019年3月30日
編集・発行　中野区立中央図書館

印刷番号　30 指中教図中第 384 号

所在地　〒164-0001　東京都中野区中野２丁目９番７号
TEL　03-5340-5070　FAX　03-5340-5090

企画・制作／指定管理者　ヴィアックス・紀伊國屋書店共同事業体

中野区立図書館

http://www3.city.tokyo-nakano.lg.jp/tosho/